

# 富山県埋蔵文化財 調査報告書 II

1972年3月

富山県教育委員会

# 富山県埋蔵文化財 調査報告書 II

1972年3月

富山県教育委員会

## はじめに

昭和33年頃を境に、総合的な開発事業が県下各地で実施されるようになります。それに伴なって数多くの遺跡問題が派生し、幾つかの遺跡に対して緊急発掘調査が実施されました。

本報告書に収録した小杉町圓山遺跡・立山町吉峰遺跡・富山市小竹貝塚遺跡・立山町野口遺跡は県下を代表する縄文時代前期の遺跡であります。調査研究が比較的遅れている前期兜明の為の資料をわたくし達に数多く提供してくれました。幸いその4遺跡の大部分は現状のまま保存されています。

本報告書の刊行が学術研究並びに多くの遺跡保存への一助になれば幸いに存じます。

文末ではありますが、これまで調査並びに整理期間を通して努力していただいた関係者諸氏に心から謝意を申し述べます。

富山県教育委員会教育長

村上元之輔

## 例　　言

1. 本書は小杉町岡山遺跡・立山町吉峰遺跡・富山市小竹貝塚遺跡・立山町野口遺跡の調査報告書である。
2. 調査は富山県教育委員会が主催したが協力機関その他については本文を参考照願いたい。
3. 遺跡写真は各調査員が撮影し、遺物写真は小島俊彰が撮影した。遺物実測は主に橋本が行なった。資料整備並びに拓影はいちいち記さないが多くの人々の手をわざらわした。記して謝意を申し述べたい。
4. トース並びに本文の執筆は橋本正が行なった。責は全て橋本が負うものである。
5. 記述にあたって、内部にあっては小島俊彰・藤田富士夫・舟崎久雄、外部にあっては漢晨氏をはじめ佐原真・小林達雄各氏に有意義な教えをうけた。記して感謝する。
6. 図版は遺跡単位に集録した。本文との直接的な組み合わせはなし得なかつた。しかし、出土資料はそのバラエティーを全て組み入れた。この点をご了解願いたい。

# 目 次

はじめに

例 言

## 第Ⅰ部 小杉町圓山遺跡

第1章 調査	2
第1節 調査の状況	
第2節 番序	
第2章 遺構	5
第1節 繩文時代	
第2節 弥生時代	
第3章 遺物	7
第1節 繩文式土器	
第2節 石器	
第3節 弥生式土器	
第4節 勾玉・管玉	
第5節 鉄器	
第4章 考察	11
第1節 弥生式土器	
第2節 方形周溝墓	

## 第Ⅱ部 立山町吉峰遺跡

第1章 調査	16
第1節 調査の状況・番序	
第2章 遺構	17
第1節 繩文時代早期	
第2節 繩文時代前期	
第3章 遺物	19
第1節 先土器時代の石器	
第2節 繩文式土器	
第3節 石器	
第4章 考察	23

第1節 先土器時代

第2節 縄文時代早期

**第三部 富山市小竹貝塚遺跡**

第1章 調査	26
第1節 調査の状況	
第2節 層序・貝層	
第2章 遺物	29
第1節 縄文式土器	
第2節 石器	
第3節 骨角器・貝器	
第4節 その他の遺物	
第3章 人骨・自然遺物	32
第1節 人骨	
第2節 貝・魚骨・歯骨	
第3節 堅果 植物	

**第四部 立山町野口遺跡**

第1章 発見の経過	36
第2章 遺物	36
第1節 縄文式土器	
第2節 石器	

**第五部 縄文時代前期の諸問題**

第1章 縄文時代前期土器群の細別	37
第1節 範型と様式	
第2章 生活様式	46
第1節 貝塚	
第2節 台地	
第3節 大遺跡と小遺跡	

**参考文献**

**図版**

# 第Ⅰ部

## 小杉町囲山遺跡

# 第Ⅰ部 小杉町団山遺跡



小杉町団山遺跡位置図

# 第1章 調査

## 第1節 調査の状況

岡山遺跡は小杉町大字下条字岡山に所在する。

遺跡地は太閤山住宅団地の敷地に含まれており、昭和44年8月20日、同団地環状線の設置工事中、富山考古学会員今井清により発見された。

調査は小杉町教育委員会・富山県土木部建築住宅課・富山考古学会の協力を得て、富山県教育委員会が主催し、県文化財専門委員長が調査を担当した。調査員及び調査協力員は刊行済みの調査概報を参照願いたい〔橋本1970B〕。

調査期間は、昭和44年8月24日から同年8月25日までの予備調査と、9月9日から10月10日までの本調査に区分される。

本遺跡の調査は、開発事業の実施に伴なう本県初の緊急発掘調査であり、幾多の問題を含んで実施された。

調査員の全員が余暇を利用してしたかたちでの参加であり、調査用の体制がつねに乱れがちであった。しかも人的構成の上でもっとも大きな位置を占めていた学生諸兄の調査員返上問題を見、いよいよ困難な状況で調査が遂行されたわけである。

遺跡は発見された時点ですでに全調査区の約半分の面積にあたる南側の部分がブルトーザーによって表土の大半が削りとられていた。出土遺物は縄文時代前期後半に属するものであり、県内では比較的遺跡発見数の少ない時期に属する遺跡であるとして注目され出した。

しかし予備調査により第1号方形周溝墓及び第2号土塚が発見され、弥生時代の遺跡でもあると判定されることとなった。

本調査では遺跡の中央部を通る予定になっていた環状線のセンターラインを主軸として2メートル方眼を組むグリッド方式で実施された。調査面積は約500平方メートルで、遺溝は縄文・弥生・歴史時代のものに別れ、調査区のはば全域に分布していた。

遺跡は調査完了後、公園化工事を実施の上、保存措置が取られている。

## 第2節 層序

表上層から遺構面までの層序を観察し得たのは、第4号方形周溝墓の所在した地域にかぎられる。他の調査区は、すでに基盤面まで各土層がかけずり取られてしまっており、遺構内の

覆土層が若干観察できたにとどまる。以下、観察し得た範囲内での層序の要點を記すことにする。

#### 第4号方形周溝墓

同地区の層序は周溝内とその周溝にかこまれた墓域内に2大別できる。

周溝内は表土層を入れて5つの層を観察し得た。この5つの層の堆積は下から上へ時間的な前後関係を持ってなされたことはうたがう余地がない。最下層である第5層は黒色土で大量の弥生後期土器が含まれる。その上の第4層は黄色ローム混りの褐色土層で遺物はほとんど含まない。第3層は第5層とよく似た黒色土層で歴史時代の須恵器等が含まれる。第2層は部分によりローム層が混入することもあるが表土層直下の層である。丁寧によりかなり荒らされていることも予想されるが造構の構築後の上と関係が持たれるかも知れない。<sup>③</sup>

周溝にかこまれた墓域内は、調査前からやや墳丘状を呈していることが注意されていた。しかし、同地区の南部及び西部側は各土層かけずり取られており、すでに階段状になっていたことや、過去その中央部に作られていた送電用の鉄塔の移築工事等により荒らされており、的確な見通しは立て得なかった。

2m方眼のグリッドを設置して調査を進めたところ、表土層の下からローム混りの褐色土層が検出され、当初は鉄塔工事により作られた層と判断された。その下層には弥生式土器を含む暗褐色の第3層があらわれ、その下には縄文式土器を含む黄褐色の第4層があつてローム層へと移る。つまり同地区ではローム層の上に4つの土層がおり、しかも3・4層はそれぞれ弥生・縄文式土器の包含層であったわけである。しかも、第2層は墳丘を作る為の盛土であった可能性が強くなる。

この第2層と、同号周溝部の第2層が関係を持つことはほぼ違ひがないと思われる。すなわち、盛土後の土が移動し、そこに広がったと考えられるわけである。

土塚はこの2～4層を掘って作られたと考えられ、当初鉄塔の移築により荒らされた層と判断していた中央部の長径約2m50cm、短径約1mの掘り方がそれであった可能性が強い。この掘り方の層はローム混りの層が11層認められたが各層のしまりは悪く、新しく荒らされた地区と判断していたわけである。

#### その他の造構内

土塚内は全て合せ口式の木棺が設けられており、その大きさは長径1m80cm、短径60cm程度で木口が認められる。土塚と木棺痕跡との境界はかなり明確に認められた。これにより土塚を掘り、木棺をえぐ、土塚壁と木棺の間に土を入れたものと判断される。土塚の上部施設は不明確であるが木の蓋をかぶせ、土をかけた程度であったろう。

第3号方形周溝墓周溝内の層序は7層に別かれる。

1層は表土層、2層はローム混り褐色土層、3層は黒色土層、4層は黄褐色土層、5層は黒色土層、6層は茶褐色土層、7層は6層より明かるい茶褐色土層となっている。

1層から5層までの関係は第4号方形周溝周溝内と似るがその下層は3号の時間的古さを証明する層となる。

以上、かいつまんで層序を述べたが遺構の項で更に各遺構の関係を述べてみることにする。  
註①歴史時代に対する遺構は全て黒色土層が認められる。

この3層、5層の黒色土は、中山南遺跡にも認められた〔基教委1965・66・69・71〕。

上の黒バンド層は歴史時代、下の黒バンド層は弥生ないし古墳時代初期に形成された層と考えられる。

註②遺構を構築した後の土の捨場については不明確な場合が多い。この場合は第4号方形周溝墓の盛土用として土が利用され、それが時間の経過とともに下へ流れ、再堆積したものと考えられる。

## 第2章 遺構

### 第1節 繩文時代

繩文時代の遺構の大部分は、後続して當なまれた弥生時代の遺構々類によってその大部分が消へいされたものと思われる。遺物は全地域から散採取されたが、遺構は小ビット2、大ビット1が検出されたにとどまる。

大ビットは長径約1.5m、短径約1mの階円形で第4号方形周溝墓中に認められた。このビットの上には繩文の包含層があり、ビット内覆土はローム状の土であった。遺物はかなり多く、その大部分は繩文前期後半と考えられる。

他の小ビット2つは、土器片を若干含むものと、丁度ビットの底部に土器を數きつめた形状のものである。後者には炭化物が若干認められた。あるいは炉に關係が有るものかも知れない。この遺構も前期に属するものと考えられる。

遺物には中期・晩期の資料も認められたが遺構の痕跡は何ら見い出しえなかつた。

### 第2節 弥生時代

弥生時代に属する確実な遺構は全て墓址関係のものである。

内訳は、方形周溝墓4基（第1号方形周溝墓は中央部に土塙を検出）、周溝を持たない土塙3基がその全てである。土塙には全て、合口式の木棺が埋置されていたことが確認されている。

又、他に円形・方形のビットが7基、溝3基が検出されたが、その多くは時期が不詳か、あるいは歴史時代に構築されたものと考えられる。特に調査区のはば中央部を東西に走る溝は規模も大きく、歴史時代に属することが確実である。

弥生時代の墓群はその形式及び、配置關係から3群に類別できる。

#### 第1群

第1群に属するものは第3号土塙のみである。この土塙の形状は直径が約90cm、長径が約2m50cmと細長く、コーナーの角は直角に近い。しかも、長軸の方位は東南位に近い。

この土塙からは細身の管状3個と鉄錠が発見されたが、管状が死者の頭部近くにつけられていたと考えれば、死者の頭位は東面側ということになる。鉄錠はちょうど腰の部分につけられていたと判断できる。

## 第2群

第2群は更に2種に細別できる。

第1種は第2号・第4号土塙で第1群同様外周に周溝を持たない群で、長径は約2m20cm、短径約1mをはかる。

第2種は第1号・第2号・第3号方形周溝墓である。第2号・第3号方形周溝墓の土塙は未検出であるが、当然設けられていたものと推察される。周溝の断面は3基ともV字形に近く、第3号の東側溝中央部には長径約1.5mの小ピットが認められた。周溝部の規模は第1号が一辺約7m、第2号が約5m、第3号が約13mの角丸方形の形を取るものと考えられるが、それぞれ大きさが違う。

第2群に属す墓群中、副葬品が発見されたのは第2号土塙でしかもそれはヒスイ製勾玉1点だけである。勾玉が死者の頸に近くつけられているものとすれば頭位はほぼ東側と判断される。

第2群を構成する墓群は全て長軸もしくは溝の方位が東西に近く、しかも一定の配置関係を持っている。すなわち、お互いが切り合うことなく設置されており、このことは時間的に近接した頃に2群の各墓址が作られたことを暗示していると言い得よう。

## 第3群

第3群は、弥生時代の造構群中、最大の規模をほこる第4号方形周溝墓である。土塙は未検出であるが周溝部の一辺は約17mで、角丸方形を取るものと考えられる。

この第4号方形周溝墓は第3号方形周溝墓と切り合っており、その関係は第4号が新しく作られたことを示している。この二者は時間的にある程度離れた関係にあったと考えられるが、細部については不明確である。溝の断面は台形に近く、東側中央部には約20cmばかりの「段」が認められた。

## 第3章 遺 物

### 第1節 繩文式土器

圓山遺跡の繩文式土器は前期・中期・晩期に属するものに大別できる。出土地区は第4号方形周溝墓周辺に集中しており、その主体となるものは前期に所属するものである。

#### 前期

前期の土器群は大略4群に細別できる。

第1群は口唇部に棒状工具できざみを加える土器を主体とし、胴部は2段の繩文で飾られる。型式的には未命名であるが、類例は立山町吉峰・富山市小竹貝塚で認められている。又本群には北白川下層2式に關係が持てる爪形文土器群が伴なう。

第2群は繩文を地文とし、その上に口縁と平行な2~4条程度の粘土紐を貼る土器を主体とする。粘度紐は3~5mmとかなり太く、一見していわゆる蜆ヶ森式土器と似る。しかし、粘土紐に対する施文行為が蜆ヶ森式よりも顕著で、棒状工具による刺突文や繩文の回転施文、並びに指によってジグザグに紐を張りつける等している。更に、蜆ヶ森式とのもともと大きな違いは、口唇部に対して繩・棒状工具等により施文することで、これは早期後半以来の伝統的な系列を引くものと認められる。

第3群はいわゆる蜆ヶ森式土器に含まれる群である。ミミズ張れ状の微隆起線文土器等を主体とする。

第4群は浮隆爪形文土器を主体とする前期後半の土器群である。量としては決して多くない。

#### 中期・晩期

繩文時代中期に属する土器群は量的にはもっとも多い。中期中頃に属するものが数片検出されたにとどまる。

晩期の土器群は前半の藤木原式に属するものと後半のものに大別できる。これについては後に論述の機会を得たい。

#### 小結

さて、圓山遺跡における前期の土器群であるが、型式未命名のものを含め、多くの問題を提出するものと言えよう。

各群の器形はその多くが深鉢形で、若干、大小のバラエティーが認められる。

文様帶は前期前半の極楽寺式の系統をそのまま引き、胴部上半の装飾的な文様帶と下半の

縄文地の文様帶には限られる。他に縄文地により土器の全体が飾られる個体も各群に認められる。これについては更に後論で述べることにする。

## 第2節 石 器

石器の大部分は縄文時代前期に属するものと考えられる。特に量的にも多く、目をひくものに磨製石斧・擦石がある。

磨製石斧は小型のものが多く、全てが蛇紋岩製である。作りは丁寧で、全てが蛤刃を持つ。石斧の角は全て擦り取られており、その断面は楕円形である。使用痕も多く個体に認められ、その用途は木工用のアックスであったと考えられる。

擦石は、磨面が一面に設けられた數擦石形のものが多い。これは立山町吉峰遺跡の場合と似ている。

この傾向は、大略吉峰遺跡同様、当時の人々の食性を反映しているものと考えられる。すなわち、富山市小竹貝塚並びに同市蜆ヶ森貝塚遺跡との食性の違いを積極的に示すものと言えよう。これについては更に後論で述べることにする。

さて、圓山遺跡からは他に縄文時代前期に属する打製石錐・石錐・石匙・玉類が採取されている。しかし、その量は決して多いものではない。

石器の材質は黒曜石・はり賀安山岩・サヌカイト・滑石・チャート等他の遺跡と同様のものが選ばれている。

玉類の中に、蛇紋岩製のかなり大型な重飾品の未製品が含まれる。これには擦切痕が残っており、注目される。

晩期に属する石器としては、硬砂岩製の石冠が採集されている。これは、作りがもっとも簡単な石冠の一種で、すんぐりとした斧状のものである。

## 第3節 弥生式土器

弥生式土器はその大部分が後期に属するものである。

器形は壺形・盃形・腹形・高杯形・器台形土器に別れる。一部確実に古墳時代に属すると考えられる個体も認められるが細部については不明確である。

### 壺形土器

壺形土器にはくの字状の口縁を持つものや口唇帯が肥大したいわゆる複合口縁の口を持つものがある。後者にはS字状のスタンプを押すものや、凹線文をつけるものがある。他にそ

の口唇帯に対して2個単位の円形文を張りつけるもの等もある。壺形土器の中では複合口縁の形状を取るもの個体がもっとも多いがその口唇帯は北陸土師器第1様式と総称される中山南遺跡例ほど顕著には肥大していない。更に胴部と頸部の境に突帯が設けられる個体も認められる。

又、この他に長頸壺形や台付の壺形土器も有り、表面に丹をぬる例もある。

#### 壺形土器

壺形土器は壺形土器用と考えられるものが多い。いずれも断片であるがその形状は土師器第1様式のものと似る。

壺形土器はもっと多くの個体が発見されている。器種も口唇帯に凹線文を持つものや串描平行線を持つもの等があるが、もっとも量が多いのはヨコナデのみの個体である。内面はヘラケズリで器壁をうすくしたものが多い。この傾向もある程度中山南遺跡例と似るが、それぞれの底部は更に大きく、すわりが良い。

#### 高杯形土器

高杯形土器は大型のものが多く、杯部内面及び脚部外面に段を有する。杯部口縁の長さは底部側に比して小さく、土師器第1様式との違いを示している。脚部は円筒状の筒部と有段の裾部にわかれ、装饰性に富んでいる。内外面に丹をぬる例も多い。

#### 器台形土器

器台形土器は、高杯形土器と上部の構造はやや似るが、脚部は無段のものが多いようである。高杯形土器に比べ、装饰性にとぼしいと考えられる。

### 第4節 勾玉・管玉

弥生時代に属す玉類として、発掘調査により発見されたものは本遺跡例のみである。

勾玉は良質なヒスイを半月形に作りあげ、その後にえぐりを入れたもので、かなりの優品と認められる。県内では縄文時代の遺跡として著名的な富山市八町遺跡、同北代遺跡からも採取されている。八町遺跡からは他に細身の管玉が多数採取されており、一括して弥生時代あるいは古墳時代初期に属するものと考えられる。

県外ではこの形式の勾玉はかなり広く分布しているようであり、新潟県・石川県等で知られる。形式的には弥生時代から古墳時代にもっとも通用された優美なC字形に近いものより古い形と考えてよかろう。

この岡山出土の曲玉の類例は小杉町上野遺跡にもあり、古墳時代初期頃まで通用されたものと考えられる。

本遺跡例の穿孔は両側からあける方法で行なわれている。この貫通した穴の上方に未貫通の穿孔があり、上野遺跡にもそれが認められる。孔をあける技術に関係があるのであろうか。管玉は細身のものにかぎられる。この形式は弥生時代から古墳時代初期にかけて通用したものと考えられる。県内各地の古墳時代初期に属す集落跡から未成品も含めて発見されている。玉作り集団の存在も予想されているが、明確な実体はまだつかめない。又、その材質は、碧玉や碧玉質緑色凝灰岩等、青色の石が選ばれている。この社会的背景は後に充明されるであろう。

開山遺跡からは第3号土塙から3例発見された。内1個は穿孔がななめに入っており、身中央部に穴ができる。しかも、洞が若干ふくらんでいる。他は古墳時代初期のものと全くよく似る。

## 第5節 鉄 錫

形態は柳葉形で中子に目釘穴が認められる。身と中子の境には切刃がはめられており、錫としては大型のものである。形態的には鉄錫であるが、小型の剣という見方もでき得る。

本県の弥生時代に属す鉄製品としては唯一のものであり、現時点では富山県越後の遺品である。

保存状態は非常によく、当初からの形をよくとどめている。身部の断面は菱形で、中子は長方形もしくは方形で、棱を持つ。

身部先端の、埋没時点では下になっていた部分に木質部が付着している。出土状態からは身を下方に向け、遺体の腰に近い部分に置くか、付けるかしたことがわかったが、この木質部については木棺の一部であった可能性が強い。中子部には、発掘時すでに解体されてしまったが、柄と考えられる木片が付着していた。以上の材質については未調査である。

さて、鉄錫の類例であるが、県外の弥生時代ないしは初期古墳に求められる。

製作地等に関する知見も今のところ明確なものはないが、本例については県外、それも当時の先進地である九州あるいは近畿地方から搬入されたものであろう。本品を所持し得た被葬者の社会的位置づけも今後おおいに問題にされるべきであろう。

## 第4章 考 察

### 第1節 弥生式土器

北陸地方の弥生時代研究は、その遺跡数の少なさに因を発してか、かなり立ち遅れた分野と云われていた。

最近、石川県を中心にいくつかの遺跡調査並びに調査報告・研究が発表され、ようやく活況を以てしてきた感を与える。

富山県においても、沖積地の開発事業が進むにしたがって、重要な遺跡の発見・調査が実施されるにいたった。

しかし、全体的な体系はいまだ把握されてはいないと言つて過言はないであろう。

北陸における弥生時代の開始の時期についてはもっとも問題が多く感ぜられる。石川県柴山山村遺跡・富山県大境V層等の土器群は古くよりいわゆる接触式土器として著名であり、所属時期についても弥生時代中期初頭近くに位置づけられている（橋本1966）。この土器群は縄文式土器の伝統を強く残すものであるが、他の串目文系の弥生式土器群は全てこれ以降の位置づけが与えられている（橋本1966）。

このような状況の中で高岡市石塚遺跡の調査が行なわれ、畿内第二様式と平行する可能性の強い1群の土器と、遠賀川式土器と全くよく似る土器群が発見された。北陸の弥生文化の開始時期については今一度考えなおさねばならない時期をむかえたと言えよう。

さて、圓山遺跡の弥生式土器の主体となるものは先に示したように弥生時代後期に属する。

弥生時代後期の土器群としては石川県猫橋遺跡〔上野編1967その他〕及び同県次場遺跡上層〔浜岡1957〕出土土器が知られており、型式的には猫橋I→猫橋II→次場上層の序列が認められている（橋本1966）。

しかし、猫橋I・IIについてはその区分、次場上層についてはその内容がおのおの不明確であると言ひ得よう。

そのようなことをふまえ、本遺跡出土器に対する一応の考察を述べてみることにする。

圓山遺跡出土土器の位置付けに対するヒントは、四線文を持つ壺形土器並びに壺形土器に求められる。

四線文は弥生時代中期にもっとも盛行した文様の一種であるが、一部後期にまでその伝統が持ちこされる。そして古式土器と呼ばれる古墳時代初期の段階ではほぼ完全に姿を消し、北陸地方等では串状工具による横線文にその大部分がとてかわられる。

岡山遺跡出土器の凹線文は壺及び壺形土器の口唇部に限られる。口唇部の肥大も小さくいわゆるはね上げコボの形状をとるものが多い。ここに凹線文を2~3条つけるのが常である。

又、壺形土器の内面はかなり上部からへらけずりが行なわれており、器壁がうすくなっている。この特徴は古墳時代初期のものと類似するが、弥生後期からの伝統が継承されたものである。

このような土器群は猫橋遺跡・水見市柳田遺跡〔齊藤編1964〕にその類例が求められる。

高杯形土器は上器群全体をながめて、その個体数の占める量はかなり多い。墓へ御供される性質を考慮に入れるべきなのだろうか。

その形態は大形でしかも優美である。北陸土師第1様式のものとはかなり違いが認められる。例品は石川県次場上層及び、福井県下の方形周溝墓群に求められる。畿内及び東海地方にも杯部の形態がよく似たものが発見されており、はなはだ興味を引く。

岡山遺跡からは他に舟なりの串描波状文土器が1個体採取されている。串状工具は太めで、数は3本である。波状文の上部には簾状文さえつけられる。同じく後期に属する串描波状文土器としては石川県猫橋遺跡例が知られる。両者とも中期の伝統を継承した個体と言うことができるのであろうか。

岡山遺跡からは、中期（畿内第4様式か）に属する可能性がある壺形土器及び壺形土器が発見されている。これについては先の串描波状文土器とともに後にその問題を残すこととした。

さて、このような内容を持つ岡山遺跡の土器の具体的な位置付けについては若干の問題もあるが、弥生時代後期末に比定したい。この場合、後続する北陸土師第1様式との連続性において重要な位置を持つと考えられる。従来第1様式と呼称される群については2様式に細分することが可能であるが、これについては後の機会に論することとした。

註①これについては工楽普通・安達厚三氏の注意に端を発する佐原真氏の発言がある。又、弥生式土器についての考え方については三氏をはじめ多くの方々の御教示を得た。記して謝意を申し述べる。

註②かくゆう岡山遺跡の弥生式土器についても不明確な部分が多い。猫橋遺跡には弥生中期に属する個体がありそうである。この場合、どこから中期とするかの問題が派生するが、一応、畿内における様式及び時期区分を用いるのが便利と考えられる。

註③凹線文は誤解を受けやすいを称らしい。これに対する筆者の態度を示しておいた〔富山县教委1971〕。

註④北陸地方の弥生式土器・土陶器は畿内及び山沿地方の上器との類似点で重要である。

特に水見市人境洞窟遺跡の畿内から搬入したと考えられるタタキ目文を有する土器等、畿内との関係はおおいに示されるべきであろう。

## 第2節 方形周溝墓

岡山遺跡の方形周溝墓及び土塁墓群は、先に示したように、その形態と配置の違いにより概ね、3群に別けられる。時期的な関係については不明確であるが、少なくとも連続的な3つの時期にわたって構築されたと考えることも可能であろう。

その時期的な序列については第1群から隨時、第2群→第3群と作られたものと考えられる。

土塁墓をとりかこむ方形周溝の発生については墓域の表象ということがよく取りざたされる。その意味から他とは違う被葬者の特別的な位置が想定されているが一理ある考え方と思われる。

しかし、その根拠となると大まかには「周溝を持たないものとは違う」という点と、しばしば規模の大きいものが認められ、一部の人だけが持つ考えではあるが「高塚式古墳との連續性」という2点程度ぐらいしかない。

この場合、その方形周溝墓が集団墓〔吉岡1968〕から個人墓へと被葬品の数を減じてゆく過程を示すものとして福井県原目山遺跡〔大西1967等〕の存在が注目される。

さて、方形周溝墓なる弥生時代の墓群はここ数年来、特に多くの研究者により注意されてきた。遺跡数も方形周溝墓に類するものを加えて集成・分類が行なわれている。(大塚・井上1968・塙野・伊藤1969)。所属時期についても弥生時代中期から古墳時代初期にまでわたるようである〔森編1970〕。

県内における方形周溝墓及びそれに類するものが存在する遺跡としては岡山遺跡・小杉町中山南遺跡及び同町二ッ山古墳群〔富山県教委1965〕がある。中山南遺跡は第5次発掘調査により第1台地の西側斜面に多数の円形にめぐらる溝群が発見され注目された。<sup>①</sup>しかし土塁並びに全貌については未調査である。二ッ山古墳群は5基の方墳で構成されていたが、その実体が明確にされないまま造成事業が進み、消失してしまった。同古墳群は中山南遺跡の東方に位置するすぐ隣の舌上台地に存在し、台地の北東側寄りに方形の一辺を置く形ではほぼ一列に並んでいた。昭和37年11月、開発事業が進む中、富山考古学会により第2号及び第3号墳に対して発掘調査がなされ、第3号墳からは土塁とおぼしきものが検出された。しかし、当時はまだ方形周溝墓の存在も不明であり、しかも時間的に限られた中での調査ということもあり、古墳群全体の把握及び、正確な位置づけも行なわれずに遺跡は消失した。今にして思えば、方形周溝墓に類した墓群であったと考えられてならない。その二ッ山古墳群の特徴であるが、方形の填土を持つこと、しかもそれは盛土でおおわれ、内部には土塁と考えられるものがあったこと、更に台地の尾根に5基並んでいたこと等に要約できる。所属時期を絶する

資料はなんら検出されなかつたが、方形周溝墓の中でも新しい要素を持っていると考えてよからう。一期ごとの詳しい規模の計測値はないが、大略一辺10m、高さ2m程度のものであった。さて、このような中で、もっともその実体が明確なものは開山遺跡のみということになる。

開山遺跡の方形周溝墓は現時点での日本海側における分布の北限を示す存在と言えよう。

3群の墓群の内、土塙内に副葬品が認められたのは第1群と第2群に属するものだけである。しかもそれは方形周溝を持たないものに限られた。安直な考え方は危険であるが、少なくとも、本遺跡においては副葬品の上からは、方形周溝墓被葬者の特別性はなんら見当たらなかつたとだけは言えよう。この問題は方形周溝墓が当時の社会の中で占めた位置並びにその発生・変遷過程とともに今後明らかされることとなるだろうが、開山遺跡におけるもっとも重要な点は、墓群の方位意識が3群に別れ、しかも頭位の方向はほぼ東方である点にあろう。方形周溝墓が群在する場合、方位を同一にするケースは多々知られるが、これは墓群全体を当時的人がよく把握していたからだろうと考えられる。開山遺跡においては特に周溝を持たない土塙においてもその方位は守られていた（第2群）。

まだ憶説の域を出ないが、筆者はこのへんの理由により方形周溝墓の溝が、被葬者の特別的な位置すなわち神聖な墓域を示すという考えには否定的な立場をとっている。周溝はたんに墓域（単数・複数葬ともに）を示し、なおかつある特定の方位を示したりその墓塙の存在を示したりする目印として構築されたと考えたい。方形周溝が被葬者の特別的な位置を示すものであれば副葬品の面からもそれが立証されねばならないはずである。現時点ではその例がなく、しかも関東地方その他の地域においては高塙式古墳が発生しても根強く構築される理由もそこにあると考えられる。又、方位の問題についてはそれを強く意識する集団と全くしない集団がありそうである。これについても後の機会に論ずることにしたい。

註①これについては京田良志・小島俊彰両氏の指摘があった。

## 第 II 部

# 立山町吉峰遺跡

## 第II部 立山町吉峰遺跡



立山町吉峰遺跡位置図

# 第1章 調査

## 第1節 調査の状況・層序

吉峰遺跡は立山町吉峰野間吉峰12番地に存する。

調査は立山町教育委員会並びに地元吉峰部落の協力を得て県教育委員会が実施した。

調査は渓谷が担当し、期間は昭和44年11月16日から12月1日までの第1次と、昭和45年3月10日から3月31日までの第2次に分けて実施された。調査の詳細についてはすでに刊行済みの第1次調査報告書に譲ることにする（摘要1970A）。

遺跡地は当初、雜木林におおわれた台地であったらしいが、戦後の開拓により、広々とした畠地に変えられた。

それによる遺跡の荒れやあいはすさまじく、表面から深さ50cm程度まで開墾の手が入れられている地点が多く存在した。

遺跡地は2つあるいは3つの層を間に置いて基礎層（ローム状土層）に到達する。多くの遺物はその間層に入り混った形で群在する。そのほとんどが当初埋没した位置を離れていると言って過言はないであろう。

もっとも注意される点は、第3層として存在した黒色土層（本遺跡地では各層の中でもっとも黒色に近い層）が下にローム混じりの第4層をおいて、しかも遺構の上面を構成する層として検出されたことである。他の多くの地区では、この第3層が認められず、しかも第4層に近い層まで耕作が行なわれていることにかかわらず、この第3層が認められる点、注目に値する。その因については、第3層の下に構築された遺構にあると積極的に考えられるが、現時点では確たる証がない。多々、このようなケースがあちこちの遺跡で認められる点をあげるとどまる。

層位的にみて、その当初の位置をもっとも明確に示す遺物は先土器時代の石器（ローム状土層である第5層上部）それに回転押型文土器（第4層）等の遺物群である。これについては更に後述したい。

## 第2章 遺構

### 第1節 繩文時代早期

確実な繩文時代早期の遺構として調査・発見されたのは不定形な炉跡のみである。これは第2次調査で発見された。

炉はローム状黄色土を若干掘りくぼめ、大略長楕円に作られている。が、上面は耕作時にかなり削り取られた感じを受け、現存した部分は底面に近いところと考えられる。

炉内部は焼土が充満し、同一個体に属す回転押型土器片が10片以上、混入していた。

この同一個体に属す土器片は炉周辺に散在しており、統計50片以上に分断されていた。

当然、この炉跡を内部に置く、住居跡の検出が予想されたが、遺構面が荒らされていること、及び調査の時期が悪かったことなどにより、未調査のまま埋めもどした。

炉の作りは、先にも記したように非常に簡単なものである。

全国的にみても、早期に属す遺構の発見例は少なく、類例は今後に期待することになろうが、炉跡そのものは早期の炉跡が持つ一般的な諸特徴を備えているものと考えられる。それは1—地面を浅く掘り窪めただけの簡単な作りで、2—焼土を充満し、3—土器片をその中に含むということになろう。

現時点では、北陸では最も古い時代の遺構として重要な位置を占めるものと考えられる。

### 第2節 繩文時代前期

繩文時代前期に属す遺構としては住居跡3炉跡1基が発見された。これは第1次調査により発見され、1部未掘部分を残した。第2次調査において、先の未掘部分を調査するはずであったが、悪天候に災いされ、ついに断念した。この第2次調査では新たな住居跡の存在を予想する地区にも恵まれたが、表土及び覆土の一部を調査しただけに留まった。仮にこれを第4号住居跡と呼ぶことにする。

#### 住居跡

第1号住居跡は一辺約3mの方形プランを持つ。壁立上りの上面はかなりけずり取られていたが、かろうじてその規模がつかみ得た。底面は平面で、壁にそって不定形なピット3個が検出された。周溝はない。

第2号住居跡は一辺約3m50cmの方形プランを持つ。ピットについては未調査であるが、

他の特徴は第1号とすべてよく似ている。

住居跡内の遺物は縄文時代前期中頃に属する土器片にかぎられ、しかも大部分が細片であった。

第3号・第4号住居跡についてはその存在が確認できたにとどまる。遺構全体の調査は後日を期したい。第3号については前期末葉頃の住居跡である可能性が強い。

#### 炉跡

炉跡は前期に属すると考えられるものが1基確認されたにとどまる。

自然石及び、擦石を組み、ほぼ円形にファイアーピットを囲む。その中には少量の炭化物と焼土が検出された。所属時期についてはその擦石の形態によってほぼ推定した。

## 第3章 遺 物

### 第1節 先土器時代の石器

先土器時代に属する石器は、全て第2次調査で発見された。

内容はナイフ形石器2点、両面加工のポイント（ナイフ形石器の1種？）1点、エンドスクレイパー1点、ドリル1点の計5点となっている。第4層のローム状黄色土層に包含されていたものは両面加工のポイントあるいはナイフ形石器と考えられるものと、ドリルである。他はその上面で採取された。

所属時期その他については不明確であるが、石器の石質並びにその種類については注目できる。すなわち、石質は硬質頁岩・メノウ・ハリ質安山岩であり、多数のものにわたっており、この性格は福光町人母遺跡〔西井1968〕あるいは小杉町新造池遺跡〔西井1963〕とよく似ている。

ナイフ形石器のうち、小型に属す1点は先端部を欠く。基部の形状からはほぼ三角形に近い形を想像させる。他の1点は大型で、その形が明確ではない。

両面加工の石器は、一見ナイフ形石器とその形が類似する。類例は信州地方に知られるようであり、それとの関連性に興味が引かれる。

エンドスクレイパーは、もっとも典型的な形をしている。刃部は両面加工されており、この類例は新潟県の荒屋遺跡に求められる。

ドリルは他に例をみない。尖頭部断面は梢円形であるが、第2次加工は入念である。

このような石器組成は先土器時代の仲間でも後出的なものと考えられる。

### 第2節 繩文式土器

吉峰遺跡の繩文式土器は、早期・前期・中期・晩期の4時期に大別できる。個体数がもっとも多く、量的に他を圧しているのが前期に属する群であった。

#### 早期の土器

早期の土器は回転押型文系の土器と貝殻文系の土器に二別できる。

回転押型文系土器の個体数は少ないが3型式に分類できる。第1群の文様は連珠梢円形文で、器壁が4~5mmと非常にうすく、焼き締め状態の良い土器群である。

文様は帯状にしかもほぼ全面に対して施文されている。これに属する土器は2個体検出され

ている。

第2群は桜井第1群と似る。文様は、楕円形文・山形文・格子形文の3種が認められる。

第3群は桜井第2群と平行する。胎土内には植物繊維が混入され、文様は楕円形文だけである。

貝殻文系の上器は、全てが表面採集資料である。関東の出戸上層式あるいは新潟県以北に広く分布している常世式とよく似る。文様は貝殻腹縁による押圧文と、沈線による平行線や区画した文様等がみられる。類例は岐阜県根方岩陰などにもみられ(大江・安達1967)、それらと同系に属するものと考えられる。

色調は赤褐色で、胎土内には、少量であるが植物繊維を含む個体が認められる。

所属時期については確証はないが、桜井第2群に平行する時期と考えている。

#### 前期の土器

吉峰遺跡の前期に属する上器は植物繊維を含む古式のグループと以後のものに大別できる。量的にもっとも多いのは前期後半に属するグループである。

前期前葉に属する土器群の内容は、上市町極楽寺遺跡を標式とする極楽寺式土器(小島1965)によく似る。胎土内には植物繊維を含み文様は貝殻条痕文・繩文を基本とする。器形は尖底もしくは平底を持つ深鉢形で、口辺に突起を持つものや、口唇に繩文及び刻みを持つものが多い。

繊維土器の内、繊維の量及び焼成の状態に違いが認められる。特に赤褐色の個体が目立つが、繊維の量が多い。文様も表裏共貝殻条痕がついており、この性格は早期後半の貝殻文系土器と系列が引ける。あるいは早期後半に比定し得る上器群であるかもしれない。極楽寺式土器の内容については、石川県佐波式が早期、極楽寺式が前期初頭として編年されている。該期に属する遺跡数もやや増加しており、その実体は繊維土器群の細分という方向に進みつつある。少なくとも繩文時代早期後半から前期前葉にかけて4期程度に細別できる可能性を持つ。これについては別に論じたい。

前期中葉の土器は爪形文を付すものと、粘土帯を貼り付け、刻みを付けるものが認められる。他地域の土器や、その系統を引く個体が多い。それらは北白川下層II・III、諸磯A・B式土器の系列に含められる。かなりしっかりしたかたちで地方色の強い土器も含まれており、各群は型式として認定し得る。

前期後葉の上器は、いわゆる艶ヶ森式土器(富大考古1954)及び以降に比定される上器群を指す。微隆起線文で体上部を飾るもの、浮隆爪形文を付すもの、半細竹管文を使うもの等が認められる。

#### 中期の土器

中期の土器は、木目状撚糸文と半截竹管文を主な文様とするいわゆる新保式土器を主体とする。しかし、その量は決して多くない。1個体であるが有孔鉢付土器の範に入る土器が認められる。この個体については新保式に含まれない可能性が強い。

#### 晩期の土器

もっとも量が少ない土器群である。前葉と後葉に属するものが認められるがその実体は不明確である。

### 第3節 石 器

縄文時代の石器はその大部分が前期に属すと考えられる。石器量は過去の表面採集資料を加えると相当の数にのぼる。中で、もっとも目を引くのは、石匙と擦石類で、当時の吉峰台地における生活の中心を示す石器と考えられる。

石匙は横型のものが大部を占め、小型に属す。石は硬質頁岩・チャート・メノウ等を用い、作りは全体的に丁寧である。その横型の石匙は更に三角形に近いものと、台形及び橢円形に近いものに2別できる。刃部は底辺と考えられるが前者は蛤刃、後者は片刃に作られる傾向が強い。機能上の相違も考えられるが、確証はない。

擦石はいわゆる穀擦石の形態に似るもののが大部を占める。この受け石となる右皿は偏平な面を持つものが多く、その面は上石である擦石の磨面とはほぼ一致する。

擦石の磨面は一面のものが多く、まれに2面持つものが認められる。穀擦石形以外の形を取るものは、その多くが所属時期を異にするものと考えられるが、よく実体はつかめない。

石器は他に石鏃・石錐・石錐・玉類・石鋸・磨製石斧・不定打製石器等、多様に及ぶ。畿内及び東海・関東にかけて分布しているひょうたん形の打製石器等も発見されており、文化の交流を考える上で重要な資料となっている。

石鏃は硬質砂岩製で石器の原材を擦切るのに使用されたものであり、擦切目を残す磨製石斧も発見されている。

磨製石斧は大・中・小の3型に分れ、全て蛤形の刃先を持つ。使用痕は刃先の両側に認められ、その方向は長軸からやや傾き、刃の両側に認められる。以上によりその多くがアックスとして使用されたことがわかる。大部分が木工用として使われたと考えられるが、確証はない。

磨製石斧の作り方は中期に属するものとはかなりの違いが認められる。前期の石斧はほぼ全面に磨面を持ち、しかも各々の磨面は小さい。側辺との棱も角がかなり丸く、各面は放物状となっている。県内における前期中頃の遺跡から出土する磨製石斧は全てこの型に属し、強い範型と、手法によって支えられていたものと考えられる。

この傾向は石匙・石鎌・石錐にも認められ、他の石器はその量とともに各遺跡によってその様相が異なる。このことについては別項で論ずることとしたい。

## 第4章 考察

### 第1節 先土器時代

県内における先土器時代の遺跡は20ヶ所近く知られている。内容的にはかなり良好な遺跡も多いが、その大部分の資料は表面採集によっており、実体は不明確である。

先土器時代の遺跡はその石器組成ならびに原材である石の選択性によって大きく2つのグループとして認識できる。

1つは、硬質頁岩をその主なる原材とするグループで、今一つは様々な石—例えばメノウ質・安山岩質・黄石等の石をその原材に加えるグループである。これに瀬戸内地方の影響を強く持つサムカイト製の石器群を加えて、その内容はいよいよ複雑となっている。

前者、第1のグループは東北地方のいわゆる東山系の石器群と総称されるものとよく似ており、後者、第2のグループは小型ナイフ形石器を特徴とする群と考えられている。

各群は同一時期にいとなまれた遺跡であると考えるより、むしろその間には細かい時間的な差を認めた方が適当と考えられる。

第1グループは、東山型の色彩を色濃く持つ眼日新丸山遺跡〔江坂1959〕、安養寺遺跡〔西井1966〕、定形的なエンドスクレイバーの量を増す平林嫁兼遺跡〔西井1972〕等にその内容が細分され、第2のグループも細分される可能性が強い。

これらに後続する細石刃の石器群は県内ではまだ発見されていない。

このような中で、本遺跡石器群の占める位置は、第2のグループの中で認めることができるもの。

原材としてはハリ質安山岩（ナイフ形石器）、赤石（メノウ質の両面加工石器）、黄石（ドリル形石器）、硬質頁岩（エンドスクレイバー）等が認められる。この傾向は小杉町新造池遺跡、福光町人母遺跡等とよく似ていることについては先に示した。

吉峰遺跡の両面加工石器はナイフ形石器の範に入れ得る形態を持っており、エンドスクレイバーの刃部も両面加工となっている。

この両面加工の手法によるナイフ形石器は長野県地方の先土器時代後半に属す2・3の遺跡で知られており、エンドスクレイバーは福光町人母遺跡、新潟県荒屋遺跡等で知られている。

遺跡の時代的な問題を解決する糸口はこの辺に求められるものと考えられる。

註①小林道雄氏の教示を得た。荒屋遺跡は細石刃を中心とする遺跡として著名である。したがって本遺跡と

の直接的な関係は無い可能性が強い。

## 第2節 繩文時代早期

富山県の繩文時代早期に属する遺跡は回転押型文系の土器では代表される。遺跡数は10ヶ所を若干越える程度であるが、その内容は5期に細別できる。

もっとも古式に属する群は富山市北代遺跡に認められる。この個体は1個体ではあるが、胎土に黒鉛を多量に含み、器壁がうすい。文様は山形文で、原体は1周2個で、山形が3段印刻されている。施文は帯状に施こされており、その内容は岐阜県桑沢遺跡〔大野・佐藤1967〕で注意されたものに似る。

吉峰遺跡の回転押型文土器は3群に大別できる。第1群は先の第1期土器群に後続する第2期回転押型文と考えられ、2個体発見されている。胎土内には塵芥物が少なく、器壁はうすい。文様は楕円形文の1種である連珠楕円形文で、帯状にしかもほぼ全器面に対して施文されている。類例は岐阜県地方に認められる〔橋本1968〕。

吉峰第2群は桜崎第1群とほぼ対比できる。文様には山形文・楕円形文・格子目文が認められる。

第3群は桜崎第2群と対比できる。胎土内に植物纖維が混入されており、文様は比較的大きな楕円形文のみである。

他に早期に属する群としては貝殻腹縁文を主なる文様とする貝殻文系の土器群がある。

この土器群は関東の田戸上層式に対比できると考えられ、新潟県から岐阜県地方にかけてよく似た土器が認められる。この土器を出土する遺跡は5ヶ所程県内で知られており、その分布は更に濃度を加えるものと予想される。吉峰遺跡ではその実態並びに他の早期土器群との関係は認めなかったが、器壁内に植物纖維が微量含まれる個体があることから、回転押型文第3群（桜崎第2群）と関連するものと考えている。この土器群は赤レンガに近いような色調を持っており、一風独特である。後続する前期初頭の範囲に含まれている衣裏貝殻条痕文系土器の中にもこの色調の個体が含まれており、そのような群の編年的位置が早期に属する一つの根拠となっている。

## 第Ⅲ部

# 富山市小竹貝塚遺跡

### 第三部 富山市小竹貝塚遺跡



# 第1章 調査

## 第1節 調査の状況

小竹貝塚は淡水産の貝塚として戦後発見されたものであり、過去2回程小発掘がなされている〔高瀬1958、岡崎1966〕。貝塚の規模は不明であったがかなり大規模であることが判明した。

貝塚は富山市興羽町字種田1377・同1487番地に所在し、近くには字貝塚なる地名も残っている。現状は水田となっている。

昭和45年度この地区に対して白石用水路及び新鐵治川承水路の新設計画が持たれ、その仮排水路の設置によってかなり大量の縄文時代前期に属す遺物の出土をみた。この地点には貝層が認められなかった。

富山市による第1回目の予備調査（昭和45年10月10日～10月11日）の後、遺跡地保存の為の協議が持たれたが、工事関係者の了解が得られず、富山県教育委員会による第2回目の調査が実施された。この第2回目の調査は昭和46年2月22日から同年3月7日まで行なわれたが、当初調査を計画していた土器包含地点（土器第1地点）の北方約60mの地点から工事の進展に伴なって人タニシ・蜆類を主体とする巾約50mに及ぶ貝層が出現した。第1回目の調査において深さ1m程度試掘をした地点であったが、それよりも深部に貝層がみられたわけである。この地点を貝塚第2地点と呼び、先に発見されていた蜆を主体とする地点を貝塚第1地点と呼ぶことにした。

調査は雪の中で実施されたわけであるが、湿原状を呈する地帯での自然湧水は思ったより少なかった。ただ、遺物の正確な出土状態は、ヘドロ状の土にはばまれて思うようにつかめず、多くは採取し得たにとどまる。

遺物量は膨大な量にのぼった。過去、遺跡が埋没して以来、全く人にさわられることなく、遺物が眠っていたわけである。

貝塚の範囲については不正確ではあるが、少なくとも100m以上には及びそうである。土器第1地点と貝塚第2地点の間に無遺物の地帯があり、基盤は包含層が認められる地点より上面にある。この高台を開むようにして貝塚地点及び土器地点が認められるわけであり、全体の形としてはほぼ馬蹄形を取る可能性が強い。少なくとも、縄文時代前期の貝塚としては日本でも数少ない大貝塚と言えよう。

## 第2節 層序・貝層

小竹貝塚の層序は土器包含地点（B地点）と貝塚地点（A地点）で確認された。各地点の層序関係は未確認であるが、かなりの違いが認められる。

### B地点

B地点の層序は耕作土及び基盤層を含め、5層に分割される。

第1層は黄褐色の耕作土層で、若干の近世陶磁器が含まれる。第2層は弱粘質の灰褐色土層で、第3層は青色粘土層となっている。この3層にはほんの微量、縄文時代前期の資料が含まれるが、第4層は全くの無遺物層であった。第4層は有機質に富む黒色土層で、縄文時代前期の包含層となっている。上下二層に分断できそうであるが、今回の調査では不明確であった。この層はヘドロ状を呈し、空気に触れるごとに暗褐色に変色し、異臭を放つ。土器の包含状態は良く、大量に含まれており、少量ではあるが骨片、貝殻細片が認められた。層の厚みは20ないし50cmであった。この下が第6層で黄褐色土層となっており、全くの無遺物層であった。この第6層が当時の基盤層と認められる。

### A地点

A地点は基盤層を含め、14層に分割される。第1層は褐色土層で、現代の耕作土を含み、少量の近世陶磁器が含まれる。2・3層は全くの無遺物層で、かなり厚く、ほぼ水平に堆積している。色調は2層が黒褐色、3層が茶褐色となっている。第4層は粘性の強い褐色砂質層で木片を含む。以上までの層はB地点のはば全面をおおっているが以下の層は地点により重なり具合が違っている。A地点の基盤層は南側から北側へかけて傾斜している。したがって北側へゆけばゆくほど層が多く認められることになる。

5層はほぼ中央部から北側にかけて認められる灰褐色粘土層で、木片が含まれる。6層はほぼ全面をおおう有機質に富む黒色土層となっており、大量の木片を含む。この層までは古墳時代初期の遺物が含まれる。古墳時代の包含層については不明確であるが、第2層に集中していたように観察された。第7層は暗緑色粘土層で、粘性がもっとも強く全くの無遺物層であった。広がりはやや広いが、南側には認められない。この層とよく似た明緑色層は北側の6層上面に認められた。これを一応7亜層とした。8層は灰青色の砂層で、北側にのみ認められたが、一部6層上面にブロック状を呈して認められた。この8層の南側に粘性の強い暗緑色砂層である8亜層がうすく観察できた。以上の層にはほとんど遺物が含まれなかった。

9亜層は黒色の混貝土層であるが、貝の密度は相当に高い。9層は暗緑色を呈し、貝の密度は更に高くなり、部分的に純貝層や灰層を持つ。北側では貝層の深さが1mを越す深さで認められ、規模の大なることが認識される。9亜並びに9層は遺物を大量に包含し、多くの

骨角器・土器片・石器類が採取された。1号人骨もこの9層から発見された。

9層の下である10層は褐色のローム状土層でその下が黄色のローム状土層となっている。  
これが当時の基盤層と考えられる。

A地点、B地点の層序は以上であるが、各地点の層序の違いで注目されるのはA地点の砂層である。この砂層は4層と8層として認められたわけであるが、いわゆる川砂としての成分を持つらしい。成分については不明であるが、貝層が堆積した後と、古墳時代の生活が始まる直前の二回にわたって塗水したことがうかがい知れる。<sup>①</sup>

その他の各層はほぼ両地点共、対比関係を持つものと考えられる。A地点は北側が深くB地点は南側が深く包含層及び基盤層が傾斜していたことから、その中間部に台地状の張り出しがあったと推定される。その台地の南側に土器のみの、北側に貝その他の拾場が設けられたと考えられる。

註①これについては現地にて藤井昭二氏の教示を得た。

## 第2章 遺 物

### 第1節 繩文式土器

小竹貝塚の土器はそのほとんどが縄文時代前期のものに限られる。表土層近くには近世の資料、その下部には古式土器が含まれていたが、主体的な出方ではなかった。

前期の土器群は一括資料としては県下でもっともその内容が充実している。時期的にも、前期の各期のものが認められ、最終的な整理が終るまでにはかなりの日数を要しよう。

もっとも出土量が多い土器群は前期中葉に属する群である。県外の土器として認められるものは関西の北白川下層2式の古い部分及び3式、関東の諸磯1式土器等であるが、一部黒浜式と類似するものもある。その中に多量の県下独特の土器群が認められ、その様相は大略吉峰遺跡と似る。

前期後半の資料はそれに次いで量が多くなる。蜆ヶ森式土器及び浮隆爪形文土器、半截竹管文による浮線文土器等その内容が充実している。

この中葉と後葉に属する土器については、どうも小竹貝塚における濃淡状態に違いがあると考えられる。各地点ごと及び層位的な調査はなし得なかつたが、一応の参考にはなると考える。

岡崎卯一が調査した地点は蜆類を主体に貝層が認められたという〔岡崎1966〕。この地点を仮にO地点と呼ぶ。このO地点は貝塚第2地点とその主なる貝を同じくする。蜆類が土体を占める貝塚として蜆ヶ森貝塚が著名であるが、O地点においても蜆ヶ森式土器及びそれに後続する土器群が遺物の主体を占めており、それぞれ共通点がそこに見い出される。

貝塚第2地点は大タニシを主体としており、前期中葉の土器を多く含む。蜆類と大タニシの生態については知見を持たないが、貝層と土器様相の違いから、古放生津窓の生成に何らかの変化があったことを認めてよさそうな気がする。あるいはただ単に縄文時代人の食性の違いがそこに現われただけかも知れないが、蜆類と大タニシの貝の利用度が中葉と後葉でそれぞれ違い、しかも蜆貝の採取については前期後葉に中心があることに注視したい。さて、貝塚第2地点の大タニシであるが、大きく成長したものが多く、小さいものは数少ない。これについて更に後論で述べることにする。

## 第2節 石 器

石器は相当量の出土を見た。もっとも量が多かったのは砂岩及び花崗岩等の円礫で、その多くが割れているか、加熱を受けている。当初、擦石かハンマーストーンの断片が多く含まれるものと考えていたが、むしろ不規則に割れしかも加熱を受けている個体の占める率が高く、炉に関係する石か、調理に関係するものと考えられる。

次に目を引くものは大型の石鍤である。もっとも大きいものは直径約20cmの扁平円礫を用いており、小さいものでも直径約10cm程度のものを用いている。重量も、通常県内中期頃に用いられる石鍤の4倍から10倍以上はあるものと考えられる。この大型の石鍤は織維土器群にも伴なっており〔小島1965〕前期中葉頃までの特徴と認められる。石鍤の用途については明確な答えを持たないが、糸かけは長軸に二ヶ所、それも表裏からの一打によって作られている。多くが魚網鍤と考えて良いと思うが、特に大型のものについては別物のような気がする。このような大型のものは北海道地方に分布すると聞くが、その関係は知り得ない。

磨製石斧も吉峰遺跡同様かなり多く作られている。製作法・タイプ共に前期の他の遺跡のものとよく似る。石鎌・石槍・石匙・玉類等、未完成品・欠損品を含め数多く発見された。石鎌は大小バラエティーに富んでおり、射落とす対象により使いわけられた可能性を示す。石槍は少ないが、先端部が大きくふくれ基部が細くなる形を取る。前期以後一般化した形がこの頃定形化されたと考えられる。

小竹貝塚の石器群中、その量が少ないと注目されるものは擦石である。先の吉峰遺跡では石器群中の中心的位置を持った石器であるが、小竹貝塚では少ない。石皿に関しては全くゼロに等しい。食性の違いを示すことはすでに明確であると考えて間違ひは無いであろう。註①加熱を受けた石はいろいろな遺跡で認めることができる。その多くは不規則に割れており、大部分が加熱の結果割れたことを示している。調理に関係するかと考えたその調理とは石焼を直接的に考えているわけであるが確証は持っていない。

## 第3節 骨角器・貝器

骨角器・貝器には主に鹿の管骨を利用した骨針・尖頭器・有孔装身具・猪牙製の垂饰品、アナグラ属系の貝殻による垂饰品・貝輪がある。その内容は豊富である。骨針・尖頭器は、主に鹿の管骨を打ち削ったり、擦り切ったりして目的の原形を得（第1次加工）、その後あらかじめ磨いて形を整えている（第二次加工A）。骨針・尖頭器等の実用の器具はこの荒磨きの段階で使用されるが、装饰品となると更に表面に加工が加えられ（第2次加工B）つやが出るほど磨き込まれる。実用品として実際に針等に使用された骨針の先端部はかなり磨滅し、

しかも荒れている。装身具とは容易に区別できる。つまり両者は作り方で一工程の違いがあるわけである。このへんの技術的傾向は磨製石器の作り方とうり一つと考えて差しつかえない。

骨針の頭部は偏平な場合は左右から半円形の切り込みを入れたものがもっとも多いが、円柱状のものはコケシの頭部状にしたり輪状に切り込みを入れたりしている。一例ではあるが孔をあけたものも認められる。

尖頭器は15cm以上の大型から5cm未満の小型のものまで種々変化に富んでいる。基部が斜めにそがれているものや、先端に反りがつくものも認められる。多くが銛ややすとして使用されたものであろう。他に鹿角を用いた尖頭器も出土している。

猪牙製の垂飾品は牙質を削ぎとり、丹念に擦り磨いて孔をあけている。骨製の装身具としては材質はよくわからないが块状耳飾が一点出土している。

貝で作った製品は3点知られている。全てが装身具として利用されたもので赤貝・角貝が使用されている。貝製品の材質は全てかん水産の貝を利用している。別に加工は受けていなかが大型の巻貝やサザエ等の貝殻も認められた。このようなかん水産の貝の人手経路等興味がそそられる。

#### 第4節 その他の遺物

縄文時代以外の時代に属す資料としては古墳時代初期頃の土器、及び管玉1点がある。管玉はB地点にて表採した資料であるが、なかなかの優品である。

他に表土層から近世陶磁器が発見された。その多くが初期伊万里焼の皿・茶わん類で、少量越中瀬戸焼が含まれる。

## 第3章 人骨・自然遺物

### 第1節 人骨

人骨の数値並びに性別等については未調査である。したがって出土状況のみを記すことにする。

人骨は第2貝塚の承水路工事施工中に発見された。頸部及び頭部は工事によりすでに取り去られており、現在したのは上腕骨及び脊椎・腰骨・下肢骨であった。出土状況はいわゆる屈葬の状態を取っており、頭位は西側に近い。脚部は折り曲げて体全体は右に傾斜して埋葬されている。上肢は手を欠くが、体部右側上方に置かれる。埋葬された土層は9層の貝層中であるが、ほぼ円形の落ち込みが認められた。その落ち込み内には灰が充満しており、埋葬に際して意識的に灰が混入されたことが理解できる。人骨の遺存状態はかなり良好である。特に腰骨から以下は足の指も残っており、形質人類学上の貴重な資料と考えられる。頭部を欠くことは非常に残念であるが、調査後、この個体のものと考えられる下顎骨の一部が採集されている。形質的な特徴については以後の専門家の研究に待ちたいが、今のところ県内最古の人類遺体として注目に値する。

### 第2節 貝・魚骨・獸骨

人骨同様、専門家の調査を受けていないが気付いた点だけを列挙する。

貝は先に示したように大タニシ・ヌマ貝・蜆類の淡水産の貝が大部分を占める。特に第2貝塚地点では大タニシが、第1貝塚地点では蜆類が主体をなす。この中に若干のかん水産の貝が含まれており、その種類はかなり広範囲に及ぶ(サザエ・ハマグリ・アカガイ・巻貝等)。量は全く少なく、大部分が装飾品用か何か特別の目的の為にこの地へ招来されたものと考えられる。決して食性の一端を示すものとは考えられない。

近接する蜆ヶ森貝塚でもアカガイの出土が知られているが〔富大考1954〕、同様の意味で理解したい。

さて、主体をなす大タニシであるが、各個体の粒は大きく、未成長の個体はほとんどない。このことは貝を採取する場合の選択性及び貝を取るシーズンの問題に一助をなし得るものと信じる。この貝取りのシーズン制については最近貝そのものを研究資料とした注目すべき論功があると聞く、これについては別に研究されるべき必要があろう。

魚骨はその大部分がかん水産のものと考えられるが、詳細は未調査である。クロダイ・スズキ等の遺体が含まれることは確実であるが入手の方法が問題である。当時の遭跡地周辺の地形及び、海岸の状況を知る一つの手がかりを与えてくれる資料となろう。

獸骨としては鹿・猪等の陸獸の他にアシカ等の海獸の遺体が認められる。もっとも量が多かったのは鹿であるが、それぞれ正確な個体はわからない。他に鳥類の管骨もかなり見られた。小竹貝塚人の豊かな食性には目を見張るものがある。詳細は後日専門家により調査されることになろう。

### 第3節 堅果植物

堅果植物としてはクルミ・モモ 等が認められた。他の植物については注意しなかったこともあってか不明である。

第IV部  
立山町野口遺跡

## 第Ⅳ部 立山町野口遺跡



立山町野口遺跡位置図

## 第1章 調査

### 第1節 発見の経過

昭和44年8月、立山風土記の丘建設事業に関連する立山町古里敷遺跡の予備調査の折、同町芦崎寺野口地内において新遺跡として発見された。遺跡は小規模ではあるが、前期中葉の単純遺跡として重要である。

遺跡は常願寺川へ流れ込む姥堂川の右岸にあり、古里敷遺跡より一段高い段丘上に立地する。この段丘上には不動遺跡もあり、遺跡の立地条件の整ったところと認められる。

現在のところ、この野口遺跡が芦崎地内でもっとも古い時代の遺跡と考えられている。

## 第2章 遺物

### 第1節 繩文式土器

繩文式土器は全て前期中葉のものに限られる。その様相は蜆ヶ森式土器より一型式程古いことを示している。土器は大部分繩文が施されており、一部丹ぬり土器が認められる。粘土ひもを器面に張り付けることも行なわれており、連続爪形文も認められる。

### 第2節 石器

石器は少量であるが石匙・石錐・磨製石斧・凹み石・擦石等一応のものが揃っている。作り材質等は他遺跡のものと全く同じである。擦石は鼓擦石の形を取っている。石錐はつまみを持つ形式で、前期ではもっとも一般的な形を取る。

さて、この野口遺跡であるが、遺跡の立地から考えても非常に小規模な遺跡と考えられる。ではこのような小規模な遺跡と大規模な吉峰及び小竹貝塚遺跡とは各々どのような関係を持っていたのか興味を引く。この問題については後論で論じることにする。

## 第 V 部

# 繩文時代前期の諸問題

# 第V部 繩文時代前期の諸問題

## 第1章 繩文時代前期土器群の細別

### 第1節 範型と様式

#### 第一群土器の範型

北陸地方における縄文時代前期の土器群は極楽寺式（含織維土器群）→朝日C式→福浦下層式→蜆ヶ森式→朝日下層式の各型式が設定されている〔高塙1966〕。富山県側でのこの型式設定の基礎は昭和26年頃、すでにはば体系化されていたと考えられる〔森1951〕。これを北陸という枠の中で更に体系化及び充実を図ったのが、山内清男博士を中心とする九学会連合の能登合同調査によることは周知の事実である〔高塙1957〕。その後、前期の研究はこれといった進展を見せなかったが、他地域との土器様相との比較並びに中期への土器変化の状況をふまえた小島俊彰の論文が提出された〔小島1968〕。この論攻には前期の研究史も総括的に述べられており、内容とあいまって高く評価される。この論攻では更に上器型式編年網の補足が試みられている。先の高塙編年に福浦上層式が加わり、他地域との相互関係もまとまりのあるスッキリとしたものとしている。

この様な状況下で、立山町吉峰遺跡並びに富山市小竹貝塚の発掘調査が実施され、かなり大量の資料增加を見たわけである。現在のところ資料の細部にわたる検討は為されていないが、予察という形で県内の前期土器群の範型を設定してみることにする。

北陸地方における縄文時代前期の土器群は、胎土内に植物繊維を含む群と含まない群に二大別できる。これは他地域の該期土器群の事情と全く一致する。この各土器群の変遷はほぼ一系のまま進められたものと考えられる。

さて、縄文時代前期に属す土器群は地域毎に若干のバリエーションを保ちながらも、ほぼ同一的な（いわゆる前期的な）顔付きを持って形づくられている。この状態を生む為の中心的な地帯は従来、関東地方及び近畿地方と認められており、各地の土器群は少なくともそのいずれかの影響下で形成されたものと考えられている。

北陸地方の前期土器群は初期から大略、近畿地方の影響下で形成された〔高塙1965〕。この様相は前期末葉で一変して、関東地方の影響を強く持ち出し中期へと持ち越されるものと考えられている〔小島1968〕。この各種土器型式形成上の大別は今のところもっとも妥当性のある考え方といえよう。

土器型式の分類は型式名が明確に打ち出されている割には明確性を欠いている。そこで従来から言われている事柄を参考にしながら範型を抽出してみることにする。

縄文時代前期の上器形式は二種に限られ、それぞれの種は口辺部の形状により更に二類に分類できる。

第一種は尖底の深鉢形土器で、平縁のものと四つの波状口縁を持つものに類別できる。第二種は平底の深鉢形土器で同じく二類に類別できる。これを前者から深鉢A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>、深鉢B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>と呼ぶことにする。この2種の土器形式によって、ほぼ前期全般の土器群が構成されており、この伝統は深鉢形土器を主体とする草創期、早期以来のものと理解される。この事情は前期中葉頃から新器種を加えるなど除々に変わると考えられるが、その新しい器種は、全体での占める位置が低いものといい得よう。

前期の土器群は先に示したように合織維土器群とそれを含まない群に二大別できる。記述の都合上、前者を前期第1群、後者を前期第2群として記述する。

#### 前期第1群

前期第1群には、深鉢形土器A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>の全ての器種が認めらる。文様帶は関東燃系文系土器群とよく似た第1から第2までの文様帶を持つ個体が多い。器内面及び底部に縄文・貝殻条痕を施す個体も認められるがこの部位については文様的効果を持たないと判断した<sup>④</sup>。

さて、前期の土器群の文様はアナダラ属の貝殻腹縁や串状工具を押し引いて描く条痕<sup>⑤</sup>(表記はK)と縄文原体を回転押圧する縄文<sup>⑥</sup>(表記はJ)と縄を押圧する押圧縄文(表記はO)と貝殻腹縁・半截竹管及び刺突具を押したり引いたりして描く沈文<sup>⑦</sup>(表記はC)、更に粘土紐を器面に張りつける隆起文(表記はR)そして無文(表記はM)の6種で構成される。この6種は前期以後、縄文時代各期にわたって支配的に採用された施文手法とみなせよう。

前期第1群の代表的遺跡である富山県極楽寺遺跡〔小島1965〕、石川県佐波遺跡〔橋本1966〕の出土資料を中心に各施文手法の体系を概観してみることにする。

両遺跡出土資料の範型は大略よく以ており、それは6つの範型に統轄できる。その型は第1から第3文様帶への各文様(先にあげた6種)の使いわけというかたちで具体的に示し得る。

K型一貝殻条痕がその大部分を占めており、他の文様と併用されることは少ない。文様帶の意識は条痕の方向を各文様帶ごとに変化させる程度にとどまる。個体数は少ないが、現在知り得る資料では他の文様と併用されることはなさそうである。条痕の文様効果は縦と横にほぼ限られており、第3文様帶は無文となっている。器種はAが大部分を占めると考えられる。

J型一縄文のみで文様帶を構成する。縄文は一段・二段の原体が用いられているが、二段のものが多用される。又、第1文様帶と第2文様帶の区別はない。第3文様帶に二段の縄文

を回転押圧する個体が認められる。

繩文の効果は斜条を基本とし、羽状条が大部を占める。この羽状条の効果を生む手法にはLR・RLの原体を交互に回転するものと、LRあるいはRL1種を左右・斜めに回転させるものの2種が認められるが、前者が多く用される。又、羽状条の効果は横の走行を持つものが大部を占めるが、まれに縦の走行を持つものが認められる。器種としては深鉢型A<sub>2</sub>あるいはB<sub>2</sub>が多く、垂下張り付け文が多用される傾向にある。

J O型—第1文様帶には二段の繩文が回転押圧され、第2文様帶は無文地に対する一段の繩文の押圧で飾られる。J型へ入れる考え方もあるが、手法が特殊であるので一つの型と認定した。

器種はB<sub>2</sub>を取ると考えられる。

J M型—第1文洋帶に繩文が施され、第2文様帶が無文になる型である。繩文の効果は斜条効果が多く、大部分が二段の繩文原体を横位に回転して施文する。

器種は全ての種類が認められるが、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>が多いと考えたい。

J C型—第1文様帶はJ M型同様二段の繩文が回転押圧される。第2文様帶は無文地に篦状工具による連續刺突文を施すことによって飾られる。第3文様帶には二段の繩文を回転施文するものがあるが、その個体数は少ない。

第2文様帶には二段の繩文を回転施文するものがあるが、その個体数は少ない。

第2文様帶の文様効果は、口辺と平行に器体をめぐって施文される帯状効果と、綾杉状効果を持つものが認められる。

器種は不明確であるが、B<sub>1</sub>のものが多いと考えたい。

M R型—無文地に隆起線を張り付け、それによって第2文様帶を生み出す型である。第2文様帶は山形効果及び帯状効果を持つものが多く、隆起線には刻みが付けられている。

器種はA<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>が多い。

以上が前期第1群の6つの型であるが、これがもっとも基本となる範型と考えられる。この各範型が全て同一時期に採用・使用されたと考えられるには若干の不合理がある。ここで他地域の縄文学的な成果を参考に今一度各文様の内いくつかの地縁的な系譜をたどってみることにする。

貝殻条痕文は早期後半に関東・近畿両地方で集中的に採用された文様である。特に他の文様と併用されることはないが、ほぼ単純に使用されることが多い。この性格は北陸前期第1群の内のK型とよく似る〔橋本1966等〕と言えよう。前期前半にこの条痕文が残る例は近畿地方に認められるが、この場合その多くが他の文様と併用される。

J O型の押圧繩文は関東地方の前期前半に多用される。この意味では花押下層式との類縁

性〔小島1965等〕は積極的に指示できる。

M R型は東海から中部地方にかけて分布する木島式に比定し得る〔小島1965等〕ことは異論のないところである。口辺部に付けられる垂下張付文もこの木島式の影響と理解できよう。

J C型の内、半截竹管でいわゆる連続爪形文を付するものは畿内で多用された北白川下層式の範囲で理解できる。アナグラ属の貝殻複縫を利用した連続刺突も文様効果という点では先の北白川下層式との類似性が指摘できる。

このように北陸前期第1群土器の文様のいくつかは他地域の文様的な「はやり」と対比すると早期後半から前期の内、2ないし3の時期にわたると考えることができる。これ自体が北陸前期第1群の時期的細別のヒントを与えているものと考えて差しつかえないだろう。

### 第1群土器の様式的区分

では次に先にかけた6つの範型の時間的前後関係について推論を述べてみる。

石川県佐波遺跡のK型土器群は、縱位にしかも波形に付される条痕が認められる。この条痕文は近畿地方の早期後半の上器群（石山式・雁式）と比定し得よう。更にこの遺跡からは東海地方の上器と類似した条痕文が認められる。<sup>参</sup>多少の問題は残るが、このK型を早期後半に位置付ける論拠をここに得たい。

M R型及びJ O型上器はその特徴より前期初頭に位置づけることは、大方の認めるところである。特にM R型は主体となるほど多く採用された型ではなく、むしろ東海地方から移入された個体と考えたい。この時期には当然主体を占めるJ型土器が採用されていたと考えられる。具体的には器壁内面に、ほほ横位の貝殻状痕を持つものをあげたい。同じく内面に繩文を附すものもこの仲間に入れたいが、今のところ確証がない。貝殻条痕を内面に附す個体をこの時期に含めたのは、貝殻状痕そのものを早期の系統を引くものと考えた所にある。

この次の時期、すなわち関東でいえば関山式、近畿でいえば北白川下層I式に相当する上器群はJ M型・J C型及びJ型で内面に貝殻条痕を持たない範型が考えられる。傍証の根拠は第2文様帯の文様効果である。この効果は先にも示したように北白川下層I式のものと類似する。その影響のもと、形成された型と認めてよいであろう。

この後の時期となると機械的には関東の黒浜式比定あるいは北白川下層II式比定の土器群が考えられるはずである。從来は朝日下層式が比定されているが、ここに若干の問題が含まれている。朝日下層からは北白川下層II式上器が発見されており、これとコンパス文を主文様とする個体は各々所属時期は違う（コンパス文は関東地方黒浜式比定）と考えられ從来の編年に入れられていた。しかし黒浜式比定土器には植物纖維の含有が無く、むしろ諸縫A式に比定せしめる方が妥当と考えられる。<sup>参</sup>この場合収入されたと考えられる北白川下層II式の位置並びに地の土器との共存関係はスッキリまとまることになる。同地点からは他に繩縫含

有土器が出土しているらしい。あるいはこの織維土器が、その北白川下層II式の古い部分と伴う土器群であるかもしれない。この辺の事情については更に後論の項で述べることにしたい。

北陸地方前期第1群土器は先に述べた考察が正しければ、2群に分割されることになる。更に、早期後半の1群並びに確証は持たないがもう1群（北白川下層I式平行）を加えることができれば、早期から前期前半にかけて四つの時期設定が可能ということになる。まだ推論の域を出ないが、仮にこれを様式のわくで理解したい。この土器群はほぼ一系の系列を引くものと考えられるので古いものより、北陸含織維系土器第1様式、第2様式、第3様式、第4様式（未確認）と仮称したい。第1様式は早期後半（K型のみ）、第2様式（MR型・JO型・J型）から以下第3様式（JC型・J型）、第4様式（J型？）までが前期前半にそれぞれ比定できると考えるわけである。

## 第2群土器の範型

前期第2群の土器形式も、その主体となるものは先にあげた深鉢形B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>に限られる。他に口縁が大きく内湾する浅鉢形土器も若干認められるが、今は実体が不明確であるため、触れないこととする。

前期第2群の範型は大きく5つにまとめることができる。文様帶の傾向は第1群とよく似るが、第3文様帶を持つものと持たないものには時間的な一線がひける。

先にあげた搬入土器と考えられる北白川下層II式を含めて記述するが、外部からの搬入土器を土着の土器群と同一の型に入れるには、若干の不都合が認められる。しかし、たとえ土着の土器であっても、他地域の土器の影響を強く受け成立したものが多いため、便宜的に同一の型で一応把握することにしたい。更に、このような関係は、先にあげた関東系の土器群にも認められる。これらも型としては同一に含めるが、実際の記述にあたっては、関東系（黒浜、諸磯系）あるいは関西系（北白川下層系）と区別して呼ぶことにし、標記にあたっては前者を何I型、後者を何II型とする。

JC1型—北白川下層II式及びその系統を受けて形成された型であり、後者の個体数はかなり多い。第1文様帶はその多くが羽状繩文で構成され、北白川下層II式の搬入土器と考えられるもの以外は、2本撚2段の繩文原体を用いる。文様の効果は左右の羽状効果を取る。第二文様帶は無文地に半截竹管あるいは二枚貝による連続爪形文を横位に附すものと、繩文地に箆状工具による横位の沈線文を數条附すものに2分される。第3文様帶には箆状工具による刻み目を附すものが認められる。

この北白川下層II式そのもの、並びにその系列で形成された上器（爪形文を持つもの）と平行沈線を持つ地方化された土器には時期差を認めることができる。これについては後に記

すことにしたい。

J C II型古—第1文様帶にはJ C I型同様羽状繩文が施されるらしい。第2文様帶は無文地に半截竹管あるいは箆状工具による沈線文が附される。器形にはB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>が認められるが、第3文様帶は無文となっている。

J型—第1・第2文様帶の区別が無く、器表面全てが繩文によって飾られる型である。繩文はその大部分が羽状効果を示すが、普通の斜繩文も認められる。第3文様には箆状工具あるいは指頭による刻みを附すものと無文のままのものが認められる。これも時期差を示すものと考えられる。

J R I型—この型は全て北白川下層式土器の系統を引いて成立した型と考えられる。

第1文様帶と第2文様帶の区分は隆起線文を設けるか否かできめられている。すなわち、いくつかの個体は第2文様帶まで繩文地が一たん設けられ、その後に隆起線を数条めぐらすことにより第2文様帶を形成している。他にあらかじめ第2文様帶に相当する部分を無文地とし、そこへ隆起線を設ける個体もあるが、前者が古い要素と考えられる。

隆起線には粘土紐を張りつけるものと、指頭で押し引いて作るものとの2者が認められるがこれについては後者が新しい要素と考えてきしつかえなかろう。前者の隆起線上には箆状工具による刻み、棒状工具による刺突、繩文等が附されるものがある。この隆起線は多く水平に数条設けられるがジグザグにはりつける個体もある。又、隆起線が弧状に連結し、その上に2枚貝あるいは箆状工具による刻みが附される個体があるが、この個体については関西方面からの移入土器と考えられる。個体数も少ない。

この型でもっとも注意が必要な部分は、第3文様帶である。第3文様帶に2段の繩文を回転施文する個体がかなり認められる。この手法は前期第1群土器から系統が引けるもので、古い要素を示すものと考えられる。以上記してきたようにこの型は他地域の土器群の影響を受けながら成立したこの地方独自の型と考えられ、文様的な各要素により、時期的な細別が可能な型といえる。

J R II型—この型は時期的には先のJ R I型の後に続く型である。粘土紐を張り付けるテクニックがもっとも盛行し、器表面のかなりの部分にわたって弧状・うずまき状、あるいは、ジグザグに張り付けられる。この型には半截竹管による連続爪形文を隆起線に附すいわゆる浮隆爪型文土器を主体とするものと、ソーメン張りと俗称される種類が認められる。第1文様帶の羽状繩文は少なくなり、ソーメン張りの一群には木目状撚糸文があらわれる。一方、浮隆爪型文の第1文様帶の大部分には繩文が施文されたと考えられる。これらは2つの型に別けられる可能性が強い。

J C II型新—この型は文様構成的にはJ R II型のソーメン張りのグループと似る。第1文

様帶には木目状捺糸文が附されるが、所属時期については問題の多い型である。

## 第2群土器の様式的区分

J C I 型が北白川下層 II 式に比定できることはほぼ疑いない。J C II 型古は一部黒浜式類以のコンバス文を用いるが、先にあげたように、むしろ諸磯 A 式に比定する方が適当と考えられる。この関東的な色彩を帯びる J C II 型占の占める位置は、前章で述べた、一北陸地方の前期土器群はその終末前まで、関西系の系列を強く引く一という表現に大きな問題を投げかけている。土着の土器としては、J 型の内、口唇部に刻みを持つものが比定できる。一部関東的な色彩が濃い土器群の存在は認められるが、全体的には北白川下層 II 式の影響を受けて成立した土器群が主体を占めるものと考えられる。このまとまりを前期第2群第1様式として把握し、北白川下層 II ・諸磯 A 式に比定したい。

J R I 型は先に記したように、関西系の系列を引いて成立した地方的な型である。文様構成並びに施文手法の違いその他の理由により、時期的に違う2群にわたって使用される。従来、蜆ヶ森式として把握されていた土器群はこの型の新しい部分にあたる。すなわち、先にも記しておいたように第3文様帶に施文するもの、隆起線をジグザグに張り付けるもの（この場合、地文には繩文が附され、隆起線が太い傾向にある）等は蜆ヶ森遺跡並びに同時期と考えられる小矢部市宮中遺跡、婦中町平岡遺跡では認めることはできず、富山市小竹貝塚・小杉町圓山遺跡等で初めて注意できた。第3文様帶に繩文を施文する手法は古いやり方（前期第1群以下）の名残りと考えることができる。そこでこの二区分の考え方を取ったわけである。蜆ヶ森の時期比定については、張り付け隆起線を持つことにより関東諸磯 B 式に比定する考え方〔小島1968〕と諸磯 C 式に比定する考え方〔高堀1965等〕がある。

小竹貝塚及び吉峰遺跡からは北白川下層 III 式土器の搬入品、あるいはその直接的な影響を受けて作られたと考えられる個体が発見されている。その量は少ないが、先の蜆ヶ森式土器の様式遺跡である蜆ヶ森貝塚からは発見されていない。この点に注視して、この J R I 型の内の古い部分にその北白川下層 III 式が組み入れられると判断したい。したがって従来からいわれてきた、いわゆる蜆ヶ森式土器群（J R I 型の新しい部分）は諸磯 C 式に比定できることになる。まだ多くの問題点を持つと考えるが、ここでは暫定的に、この古い部分を諸磯 B 式に比定しておきたい。

この J R I 型の新しい部分と J 型並びに J C I 型の内、沈線を数条めぐらすものが組み合わさって、1つの様式を構成すると考えられる。ここで古い部分を前期第2群第2様式新しい部分を第3様式として把握しておきたい。

J R II 型及び J C II 型新の実体は不明確である。小島俊彰はこの2つの型が、北陸地方においては平行して併用されるとし、更に2時期に細分した上でそれを福浦上層・朝日下

層式として編年づけている〔小島1968〕。この中で、手法的にも時間的な関係においてでも、もっとも特殊な位置を占めるのが朝日貝塚出土のいわゆるソーメン張りの土器群である。福浦上層式として知られる浮隆爪型文土器より後の所産であることは、木目状撚糸文と共存することにより、違いのない事実である。ソーメンの張り方は、山内清男により注意されたオホーツク式土器の場合同様、管からふき出すことによりなし運びられたと考えられる〔山内1958〕。手法的には余り例を見ず、立山町吉峰遺跡に一部類例を見るだけである。筆者は、朝日貝塚に特に発達した特殊な手法と考えている。

J R II型には他に浮隆爪形文が認められるが、その編年的位置は問題がない。ただ、これに J C II型新の一部が伴うとする小島俊彰の考えには若干の疑問がある。具体的な例証は持たないが、一応 J R II型の内、浮隆爪形文を持つもの（爪形文を附さないものも含む）を第4様式、J R II型の内ソーメン張りを持つものJ C II型新を第5様式（木目状撚糸文を持ち円筒下層D式に比定）として把握しておきたい。

以下、紐部については詳述することはできなかったが、一応の考え方を示してみた。各型については今一度再整理の必要がある。これについては後に改訂の機会を得たい。資料の明示については明確に細別して図版化することができなかつたが、できるかぎりの範囲で各様式の明示を試みた。大方の批判をおおきたい。

註①この山内編年では新保式が前期末に設定されている。これは東北地方の円筒下層D式上層群との関係で位置づけられた。

註②绳文時代各期に属す土器群の研究はその多くが、大中心地とその派及地ということを念頭に置いて実施される場合が多い。前期については、常に関東の諸縄式土器群と、関西の北白川下層式土器群がとりさされる。いずれが後位を持つか、非常に判断しにくいが、どうも北白川下層式に軍配が上がる気がする。すなわち、諸縄式土器群は北白川下層式土器群の影響下で形成された分布範囲の大きい土器群と考えたわけである。

註③型式と様式という単語はとかく対比して考えられがちであり、しかもその各々の内容あるいは概念規定になると全く統一が取られていない。利用者にとっては雑物中の雑物と考えられる。

これについて筆者は、型式とは一つの道筋における土器製作手法上、同一的なレベル及び内容を持つ1群を指す単位とし（1インダストリー内の1層上層群）、様式とはその複数の型式の時間的並びに地理的関係の同時性を指す単位と考えている。これについては佐原真・小林達雄氏の教示を得ているが、具体的なことについては別に論述の機会を得たい。

註④佐原真氏は器種という単語でこの形式に近い考えを示されている。各々の概念は細部までたち入ればかなり相違が認められるが、各単語をあつかう精神は同じものと考えたい。

註⑤山内清男博士並びに小林達雄氏の成果・記述方式〔山内1964、小林1967〕に従う。

註⑥見えざる部位を飾ることの意味には非常に大きいものが有ると考えられる。考えようによつては、文様の起源にかかわると思うが今日は一応文様帯からはずしておく。第3文様帯にも若干その傾向が認められるが、これ以上の発言は後にその機会を持ちたい。

註⑦条文には貝殻を使うものや串状工具を使うものが認められる。そこで工具であるKAIのK及びKUSHIのK

を記号とした。

註⑧纏文には縦状体を原体とする纏糸文を含むものとした。理由は北陸地方の前期として、各土器群を見る場合、纏文をそのような形で分離して考える必要が無いものと判断したからである。

註⑨沈文とは沈線文並びに連續爪形文・刺突文等、土器面を沈ぼつさせることによって描かれる文様の總称として採用した。この中へ押圧纏文を含めなかったのは手法の違いを重視し、効果は重視しなかったことによる。

註⑩隆起文も註⑧と同様の解釈による。ただ、深鉢形A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>の器形を取る僅体には、波頭部から垂下した張り付け文が施されており、これを文様帶に含めるか否か判断に苦しむ。少なくとも帯状の効果は持っていないと認められるので、一応ここでは文様帶のわくの中には含めないこととする。

註⑪橋本1966第10图183は天神山式（紅村1963）に比定し得よう。

註⑫この点については佐原真氏の教示を得た。氏によると、北白川下層II式の古い部分と、II式そのものが認められるという。

註⑬この点については小林達雄氏の教示を得た。関東地方諸磯A式には一部コンパス文が残るケースがあるという。北陸地方の例も、そのケースと考えたい。又、後に述べるが、小竹貝塚では爪形文及び肋骨文とコンパス文が併用される僅体が認められることもこの点を強調する点となる。

註⑭この点については樋脇氏の教示を得た。

註⑮これについては小林達雄氏との共同協議による。記して明記する。

山内清男博士はこの手法は北海道以外、内地にはないとされている（山内1958）。

## 第2章 生活様式

### 第1節 貝 塚

北陸地方の貝塚についてはすでに高堀勝喜がその総括並びに問題点について解説している〔高堀1965〕。それによると、北陸の貝塚は時期的には前期初頭から中葉までのグループと中期の貝塚に二大別でき、しかも立地が違うと説かれている。そしてその両群に属さず立地上の高さではほぼ中間に位置する貝塚として富山市蜆ヶ森貝塚があげられている。その後、発見されたものを加えて富山県内の貝塚を列記すると、以下のとおりとなる。

1. 富山市蜆ヶ森貝塚（前期第2群土器第3様式）淡水産貝類主体
2. 水見市朝日貝塚A（中期）かん水産貝類主体、朝日貝塚B（後～晚期）淡水産貝類主体
3. 水見市四十塚貝塚（後期）かん水産貝類主体
4. 水見市中波貝塚（不明）淡水産貝類主体？
5. 富山市小竹貝塚（前期第1群第3様式？、前期第2群第1様式から第5様式）淡水産貝類主体

以上の5つの貝塚の他に、富山新港周辺に多数の小貝塚が存在したと聞くが、そのほとんどは未調査のまま、消失した。

県内の貝塚は立地の上から考えると、古放生津潟の外周に営なまれた群と、十二町潟の周辺に営なまれた群に2大別できる。この2つの潟の形成と直接的な関係を持って各貝塚が形成されたことはうたがう予知がない。

貝の成育の自然的条件については何ら知識を持ち合せないが、おだやかな水のたまりと、砂質土、そして養分の供給が不可欠と考えられる。

太平洋側に比べて、砂浜の発達が悪かったと考える裏日本海側においてはこの潟もしくは入江状の景観を持つ場所こそ貝の生成そしてそれを利用採取する人の集合をもたらしたものと考えられる。この潟もしくは入江状の条件に海水の進入ぐあい（ひいてはその地形と深い関係があるであろうが）が加味されて各々別種の貝（かん水産か淡水産）が育ったものと解される。太平洋側の海進・海退の問題はほぼ定説化されたと聞くが、少なくとも北陸地方の海岸地形はせいぜいその程度で、大巾な海進・海退は無く、地形的には現在と大差ないのでないかという考えが以上により考え出されるわけである〔森川1963〕。

筆者もある程度この考え方を持っているわけであるが確証はない。少なくとも富山湾における地形の変化は先の2つの潟の縮少並びに入江化程度であったと考えたい。

このような貝類の成育に適さない北陸の地で、かなり長期間にわたって人の生活をうるおしたのは富山市小竹貝塚、氷見市朝日貝塚である。これは先にあげた特殊条件の結果であろう。今回はこの内の小竹貝塚を中心に縄文時代前期の人達の生活をながめてみることにする。

小竹貝塚では縄文時代前期第1群の後半から前期末葉までの生活がくり広げられたことについては先に示した。貝の種類は全て淡水産にかぎられるが前期第2群第3様式の時期で大タニシから蜆類への交代が行なわれた。同じ地形上に並ぶ蜆ヶ森貝塚はこの時期の所産であり、小竹貝塚においても0地点及び、貝塚第1地点がこれに当たる。

小竹貝塚ではどの貝についても大きく成長した個体が多く見受けられた。貝にも当然成長のリズムがあるであろうことにはうたがいがない。縄文人がこのリズムを利用したとすれば、シーズン的な住みわけが有ったとしか考えられなくなる。

小竹貝塚の遺物量は膨大なものがある。今回調査した範囲はごくかぎられた地域のみであったが、全体調査となれば、県下の前期資料を全て集積した量に匹敵するのではないかとさえ思えるほどである。このことは相当数の人の集合が小竹貝塚を中心に行なわれたことを示す。このエネルギーは小竹貝塚周辺の貝と、多くの陸獣・魚その性によって生み出されたものであろう。早急な結論とは出したくないが、貝取りにシーズン制がしかれているとすればそれに伴なって人の集中、拡散のテンポが毎年くりかえされたと考えられる。これについて更に緻密な資料の集積を待つて最終的な結論を出すことになろう。

小竹貝塚には優秀な石器類が多い。縄文時代前期の石器は一般に丁寧な作りのものが多いが、本貝塚では特にそれが目立つ。これも貝を食料基盤においていた費かさにその因を求めることができる。当時、一大都市の感を持って小竹貝塚が形成されたことであろう。

小竹貝塚は遺物総量に比べ、植物質の食料の生成に関係したと考えられる擦石の量が目立って少ない。石皿については今のところ1点も発見されていない。これにより他に位べ食料採取の対象が明確に違うことがうかがい知れる。

他に小竹貝塚では外洋性の魚類及び海獣の遺体が発見できる。ある程度共同作業等による計画的な漁が特れたのかも知れない。多量に発見された石錐はこの季の魚網錐である可能性が強い。

## 第2節 台 地

貝塚を持たず台地上に営なまれた遺跡はかなりの数に達する。前章でも若干触れていたが、多くの場合多量の擦石を伴なう。貝塚の生活と違い、この場合は植物性の食料を主に採取したと考えられる。このような遺跡には他の全ての遺跡が該当すると考えられ、立山町吉峰遺

跡以外は比較的小規模なものが多い。

遺跡の大小は、人口と直接的な関係を持つ。その人口の量の増減は、食料となる物質の多い少ないに左右される。前期という限った時期において県内の遺跡をながめた場合、内容的に特殊な遺跡としては上市町極楽寺遺跡、規模が大きい遺跡としては先の小竹貝塚以外に立山町吉峰遺跡をあげることができる。この基盤としては、多くの人口をそこに集中し、その生活を維持できた豊かさが有ったと仮定できよう。この豊かさは自然採集にそのかてを得ている限り1年間を通して維持されたものとは考え難い。小林達雄らが説くごとく、<sup>①</sup>シーズンによる住みわけがあつてはじめて理解できるような気がする。確証は持てないが、立山町野口遺跡のような小さな遺跡は人口の集中した状態を維持できなくなったシーズンに人口の拡散が行なわれその結果當なまれた遺跡と理解したい。

吉峰遺跡の基盤には、常願寺川がある。具体的にはサケ・マス漁をあげることが可能であろう。これに植物性の食料を加え、多くの人口をあるシーズン維持したと思われる。ここではもっぱら山の生活がそのリズムだったと考えたい。

註①これについては口頭でよくお聞きした。未開民俗ではブッシュマンの生活がよく知られている。

### 第3節 大遺跡と小遺跡

大遺跡と小遺跡について更に推論を加えてみたい。

大遺跡は当時の中核的位置を持ち、小遺跡はその分割・拡散の結果生じた。この場合、大遺跡での生活と小遺跡での生活はシーズン制をしいて住みわけられ、そのくりかえしがしばし行なわれた。

縄文式土器の共通性（遺跡が離れていても認められる）が、つちかわれる基盤はこのようなことによって一部の説明がつく。

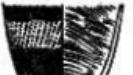
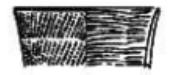
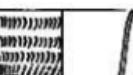
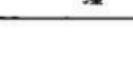
この生活のリズムは縄文時代全般を通じて支配的だった可能性が強い。

富山県内ではそのリズムのキーになった遺跡がいくつか認められる。前期では小竹貝塚・吉峰遺跡等があげられる。そのような目で今一度県下の遺跡を観察し、最終的な結論を得たいものである。

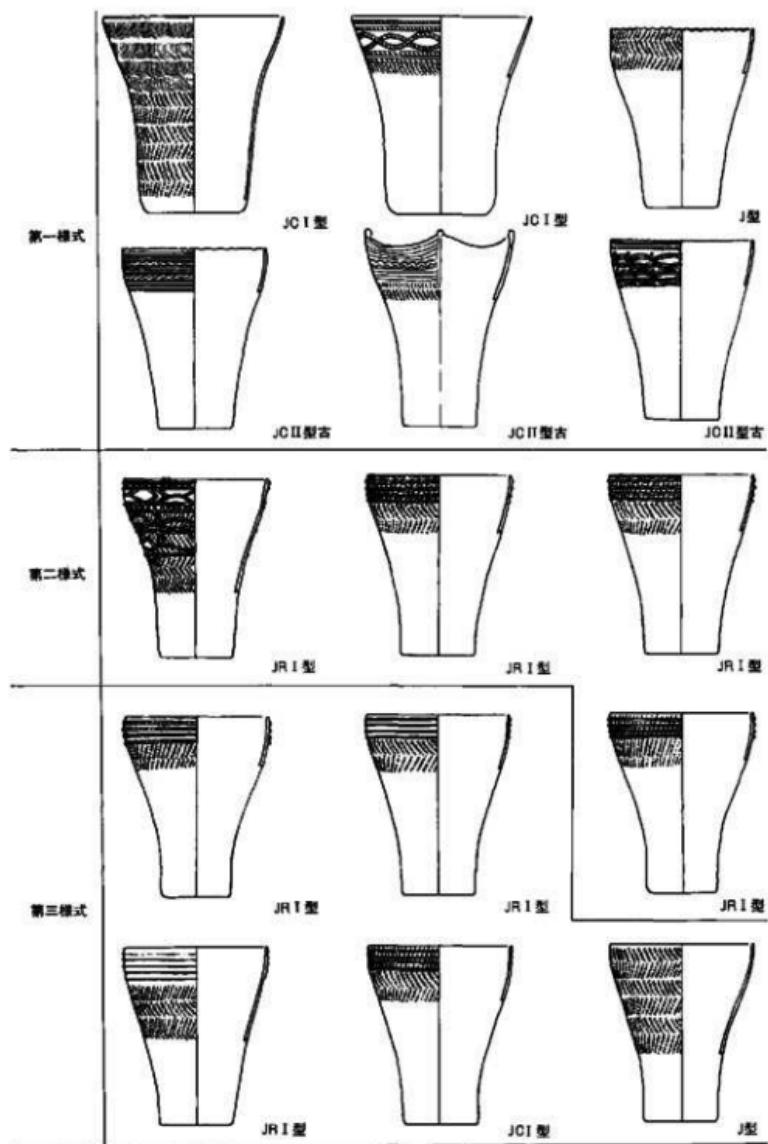
## 参考文献

- ウ 梅 原 東 治 1935 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」京都府史讀名勝天然記念物調査報告16  
 上 野 与 一編 1967 「加賀片山津町猪崎遺跡出土遺物図集『木器、土器編』」北陸大谷高等学校地歴  
 クラブ紀要第2号
- エ 江 塙 雄 弥 1959 「富山県中新川郡跟日新道跡」日本考古学年報8  
 オ 大 西 青 二 1967 「廣目山古墳群発掘概要」福井市立郷土歴史館報  
 大 江 韶 一・安 達 厚 三 1967 「2遺物(土器)」日本の洞穴遺跡5岐阜県根方岩陰所収  
 岡 嶋 邦 一 1966 「丹羽町小竹貝塚の調査」放生津潟周辺の地学的研究第3集  
 大 野 政 雄・佐藤 達 夫 1967 「岐阜県深沢遺跡調査予報」考古学雑誌第53巻第2号  
 大 塚 初 肇・井 上 裕 弘 1968 「方形圓溝墓の研究」駿台史学  
 コ 紅 村 弘 1963 「東海の先史遺跡総括編」東海業書第13巻  
 小 島 俊 彰 1965 「板來寺遺跡発掘調査報告書」富山県教育委員会  
 小 島 俊 彰 1968 「北陸における縄文前期末の様相 編年的確認と土器分布圖について」信濃第  
 20巻第4号  
 小 林 達 雄 1967 「縄文早期に関する諸問題」多摩ニュータウン遺跡調査報告II  
 サ 斎 藤 道 保編 1964 「富山県水見地方考古学遺跡と遺物」水高歴史クラブ報告書No.11-1  
 シ 堀 野 博・伊 藤 和 美 1969 「治田吉・新田山遺跡方形圓溝墓群の調査」立山文化財調査  
 報告書  
 タ 高 堀 勝 喜 1957 「能登の先史文化」大学会能登所収  
 高 堀 保 1958 「丹羽町小竹貝塚について」越中央地14号  
 高 堀 勝 喜 1965 「縄文文化の發展と地域性 北陸」日本考古学日所収  
 ツ 坪 井 清 足能 1956 「石山貝塚」平安学園  
 ト 富山大学考古学同好会 1954 「蛇ヶ森貝塚調査報告書」  
 富山県教育委員会 1965 「太閤山遺跡調査報告書(上)」  
 富山県教育委員会 1966 「新故葉山市計画区域内中山南遺跡分布状況緊急調査概要」  
 富山県教育委員会 1969 「中山南遺跡第6次緊急調査概要」  
 富山県教育委員会 1971 「小杉町中山南遺跡調査報告書」  
 ニ 西 井 龍 優 1963 「富山県の無土器時代について」越中史地  
 西 井 龍 優 1966 「安養寺遺跡について」大境2号  
 西 井 龍 優 1968 「人跡シモヤマ遺跡の石器群について」大境第4号  
 西 井 龍 優 1972 「先土器時代」富山県史考古資料編所収  
 ハ 浜 田 賢太郎 1957 「羽咋郡吉崎・大場遺跡発掘報告」石川県立高校地歴班回報5  
 橋 本 浩 夫 1966 「北陸」日本の考古学Ⅲ弥生時代  
 橋 本 浩 夫 1966 「石川県能登島町佐佐繩文遺跡の研究」石川考古学研究会誌第10号  
 橋 本 正 1968 「同軸押型土器の問題—富山県の場合—」大境第4号  
 橋 本 正 1970 A 「立山町吉峰遺跡発掘調査報告書」富山県教育委員会  
 橋 本 正 1970 B 「岡山遺跡」富山県教育委員会  
 ミ 渡 量 1966 「水見海岸の人文景観と文化財」水見海岸二上山学術調査書  
 モ 森 秀 雄 1951 「大昔の富山県・日本の大昔」清明堂書店  
 森 川 昌 和 1963 「福井県鳥浜貝塚をめぐる2、3の問題」物質文化1  
 森 浩 一編 1970 「シンボジウム古墳時代の考古学」学生社版  
 ヤ 山 内 清 男 1958 「縄文土器の技法」世界陶磁器全集第1卷  
 山 内 清 男 1963 「縄文式文化」日本原始美術一講談社  
 ヨ 吉 岡 康 幸 1968 「周辺地帯における古墳時代形成期の様相—北陸の方形圓溝墓を中心に」遠藤  
 元秀博士還暦記念史元特集号

# 図 版

		第三文様帯 第二文様帯 第一文様帯	深鉢形土器A <sub>1</sub>	深鉢形土器A <sub>2</sub>	深鉢形土器B <sub>1</sub>	深鉢形土器B <sub>2</sub>
早期	第一様式					
北陸前期	第二様式					
第一群土器	第三様式					
	(第四様式)					

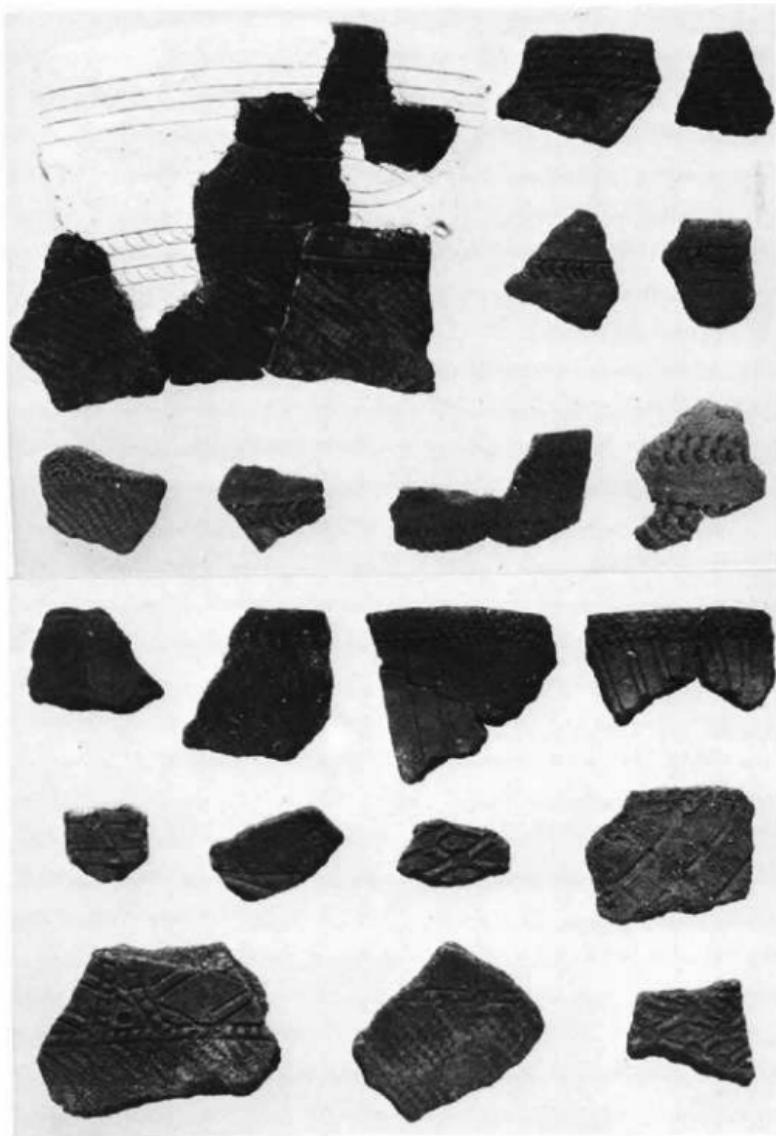
器形と前期第一群土器の範型



前期第二群土器の範型

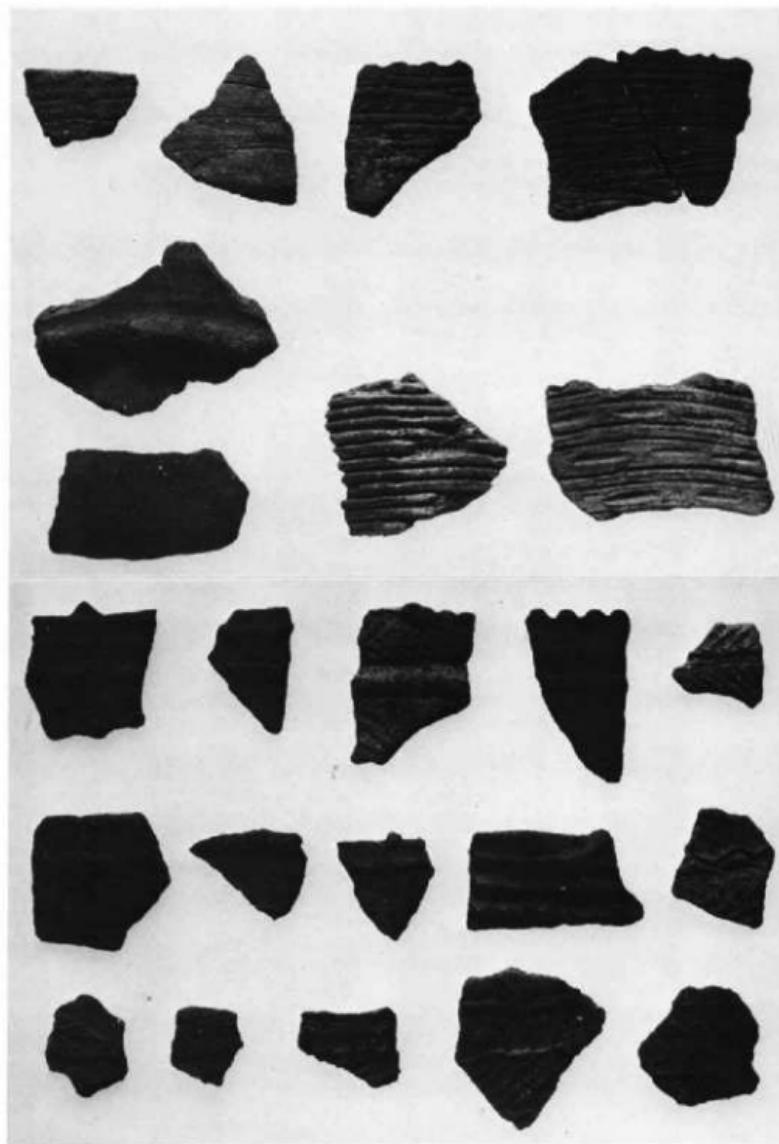


上：吉峰遺跡全景・下：縄文時代前期炉跡



上：第二群第一樣式JC I型 · 下：第二群第一樣式JC II型古

S = 1 : 2



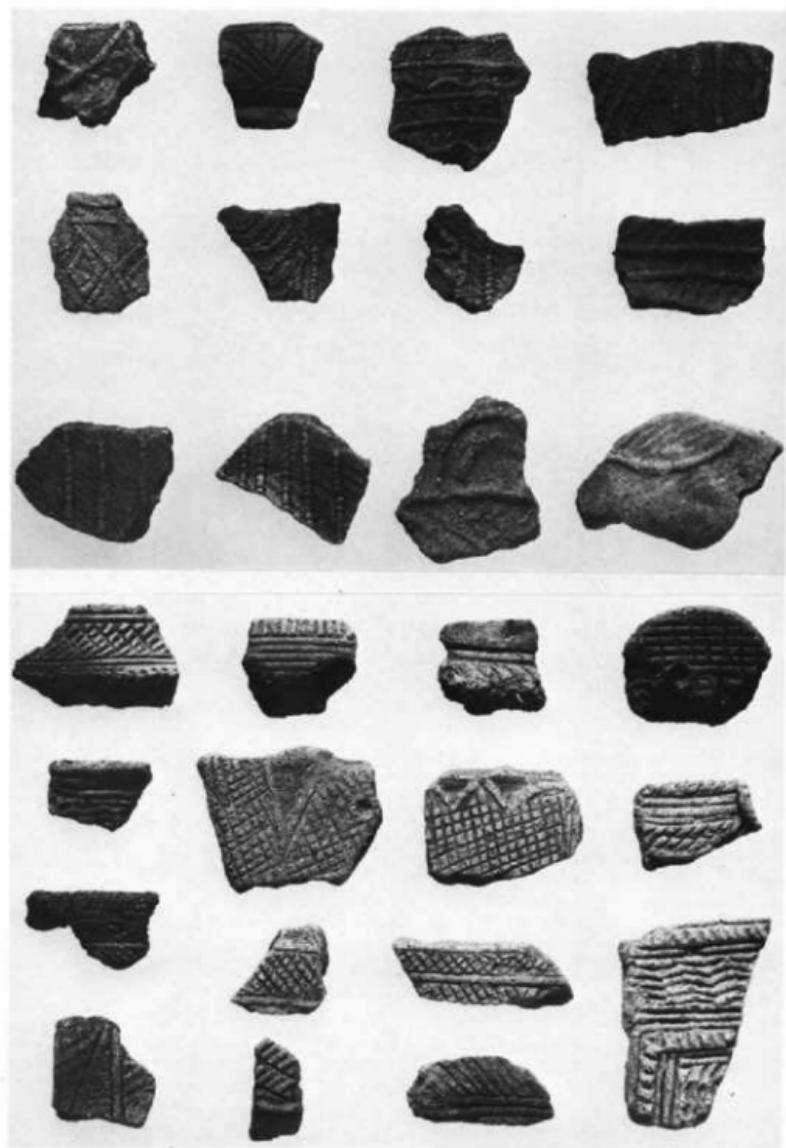
上：第二群第一樣式JC型等・下：第二群第二樣式JR I型

S = 1 : 2



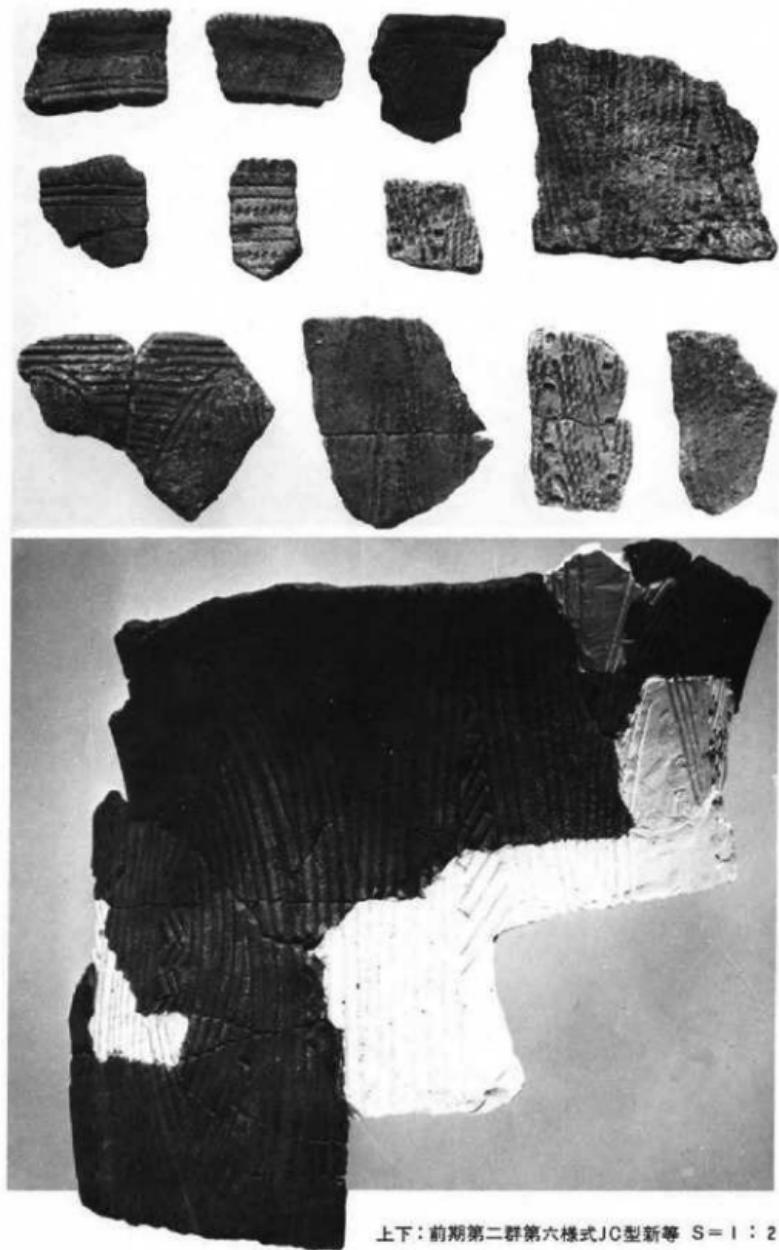
上：前期第二群第三様式J型・下：前期第二群第四様式JR II型等

S = 1 : 2



上：前期第二群第四様式JR II型・下：前期第二群第六様式JC型新

S = 1 : 2

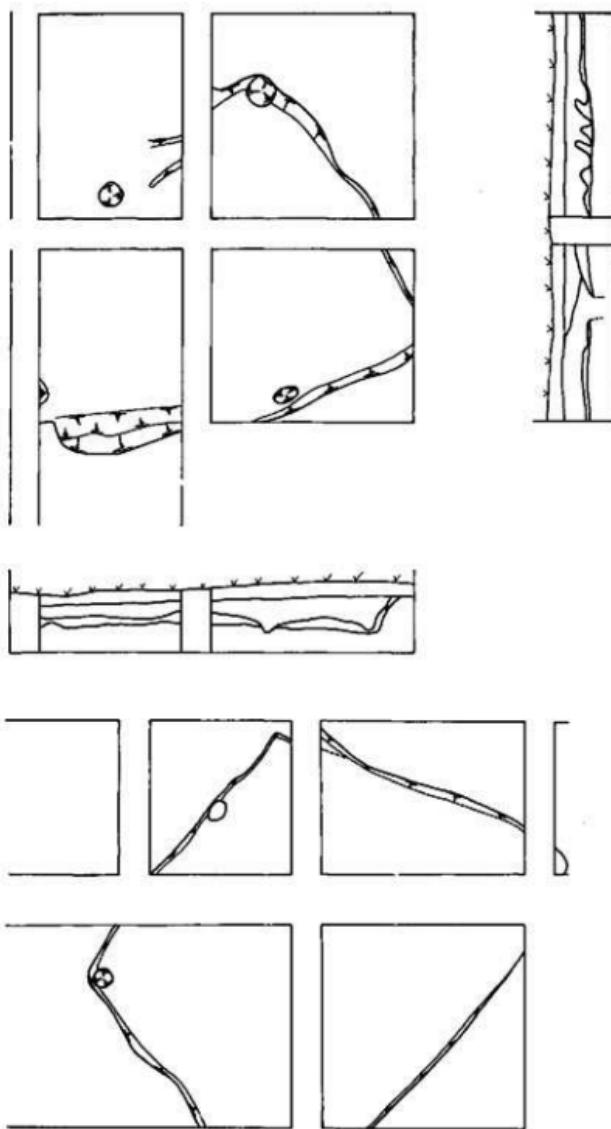


上下：前期第二群第六樣式JC型新等 S = 1 : 2



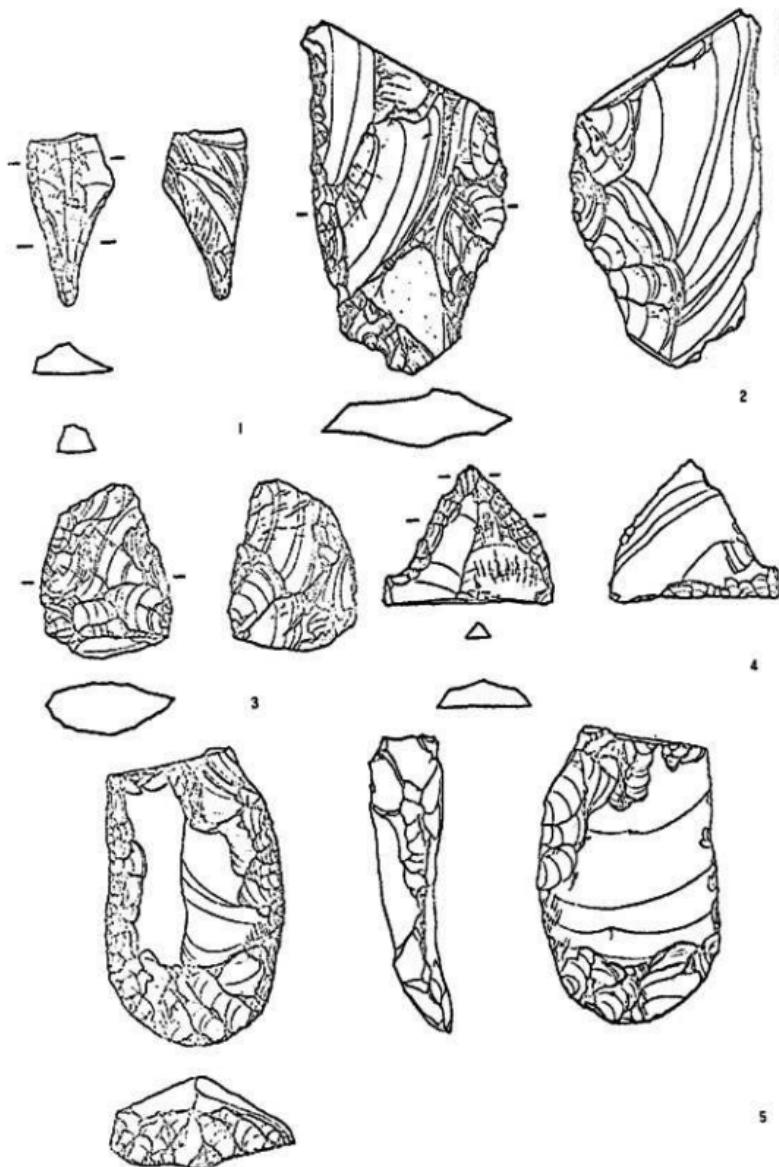
吉峰遺跡地形図

S = 1 : 800



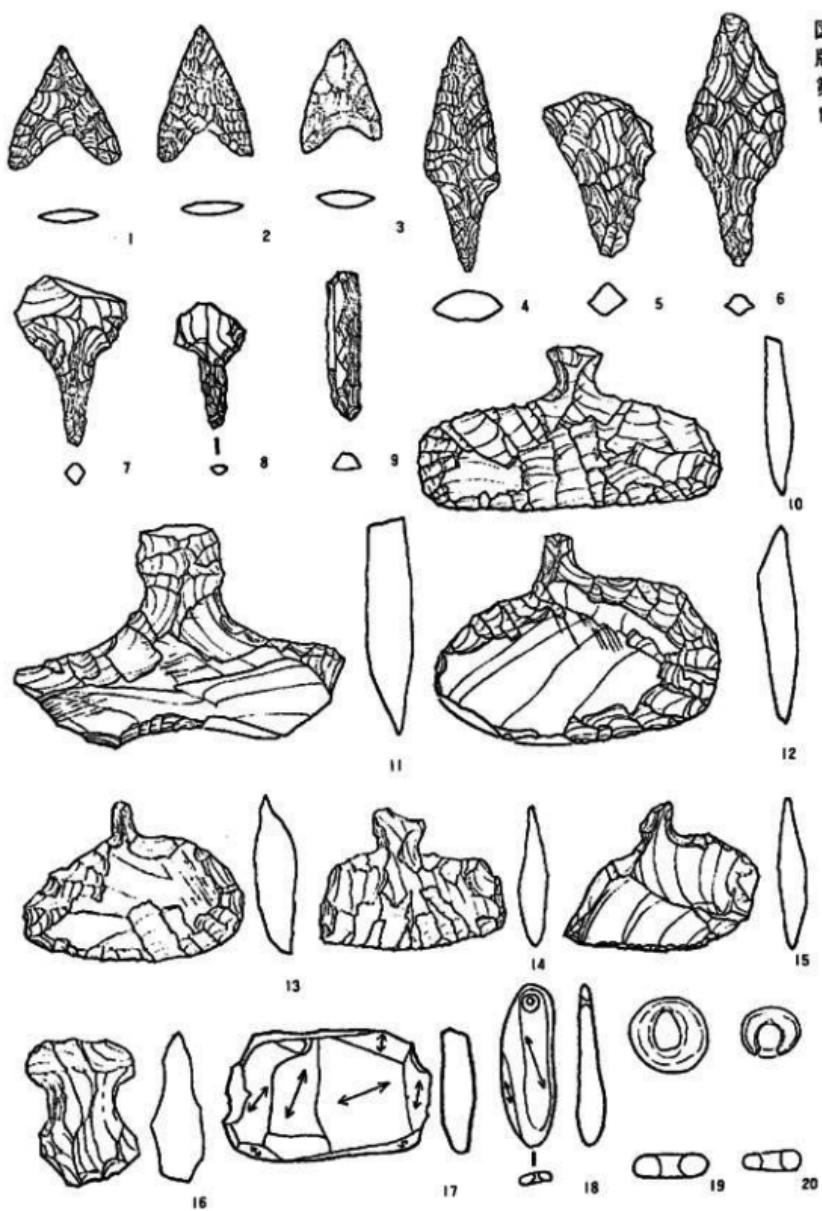
立山町吉峰遺跡上：第1号住居跡・下：第2号住居跡

S = 1 : 60



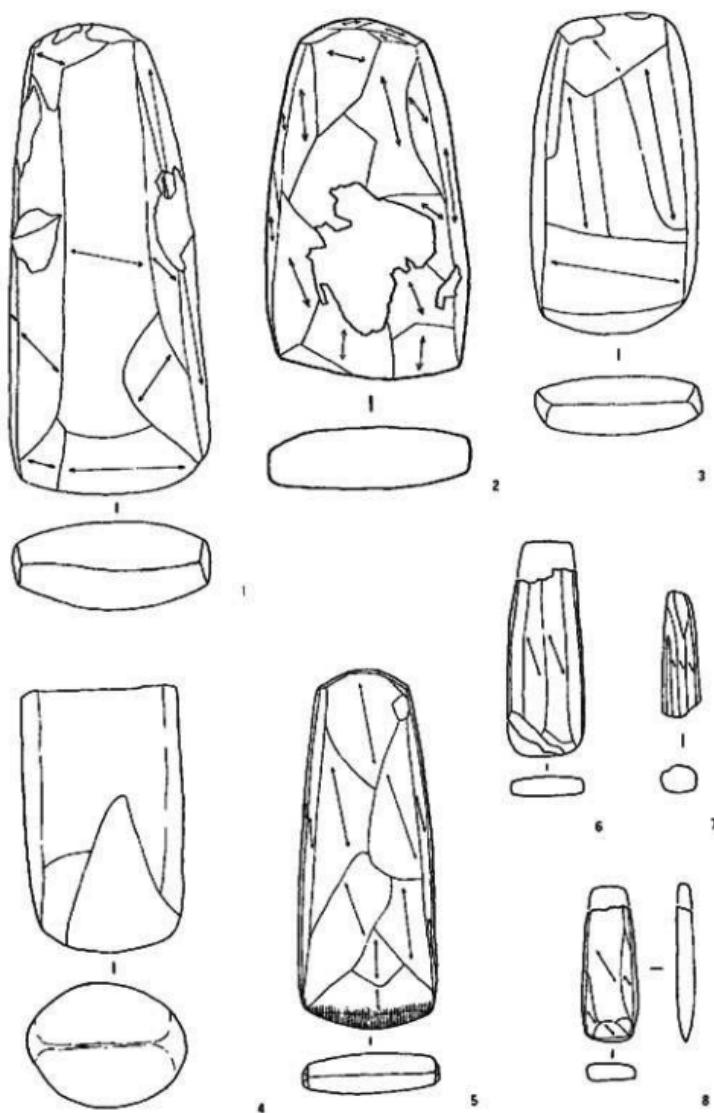
先土器時代の石器

S = 1 : 1



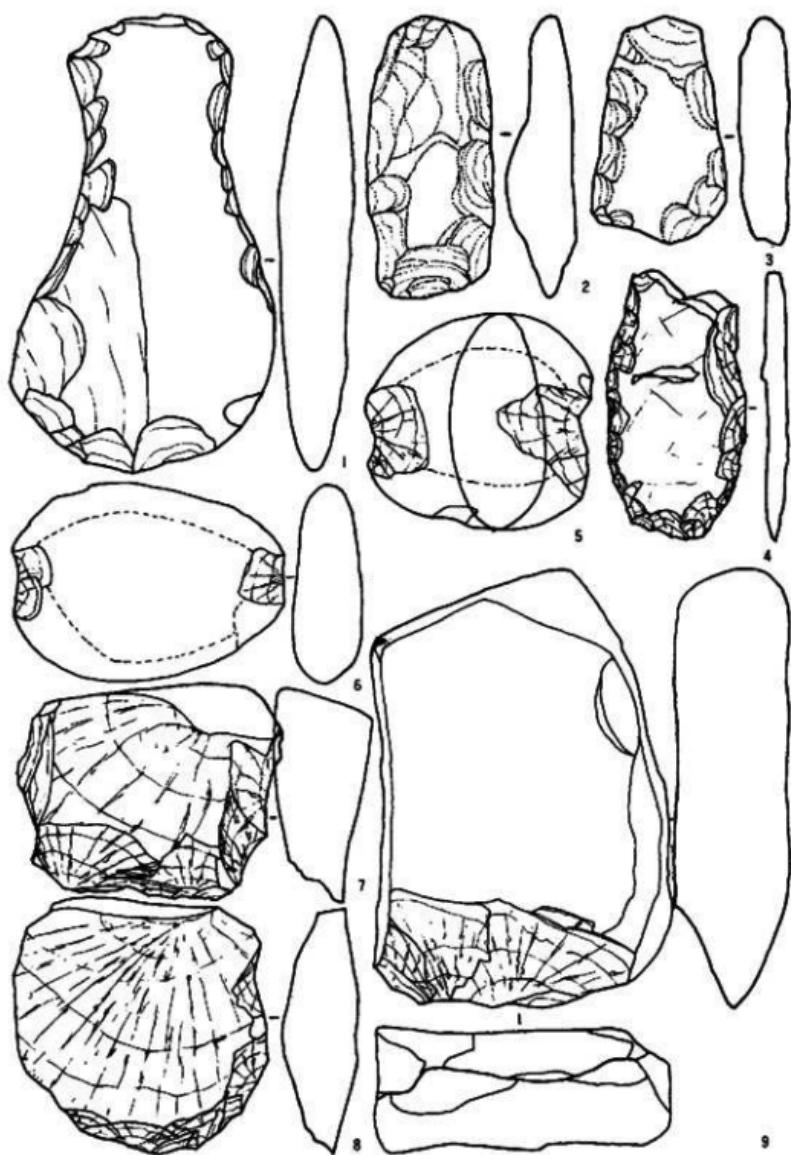
縄文時代の石器

S = 1 : 1



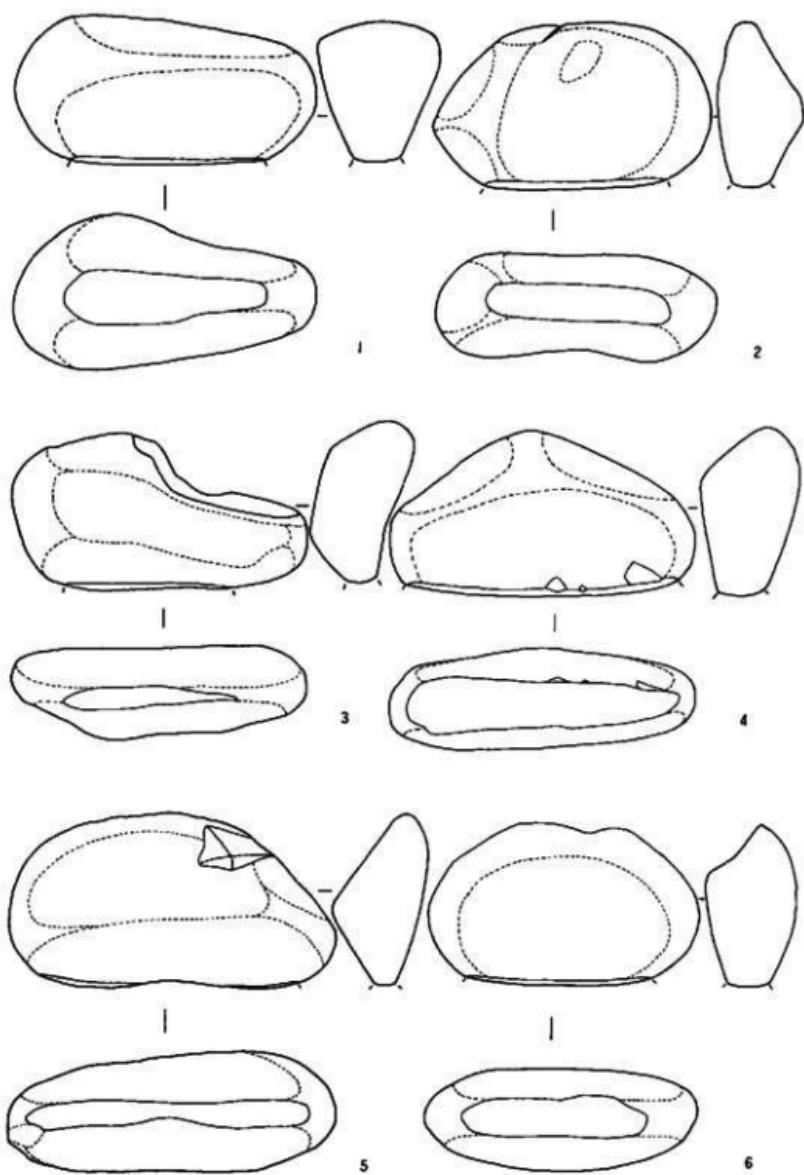
縄文時代の石器

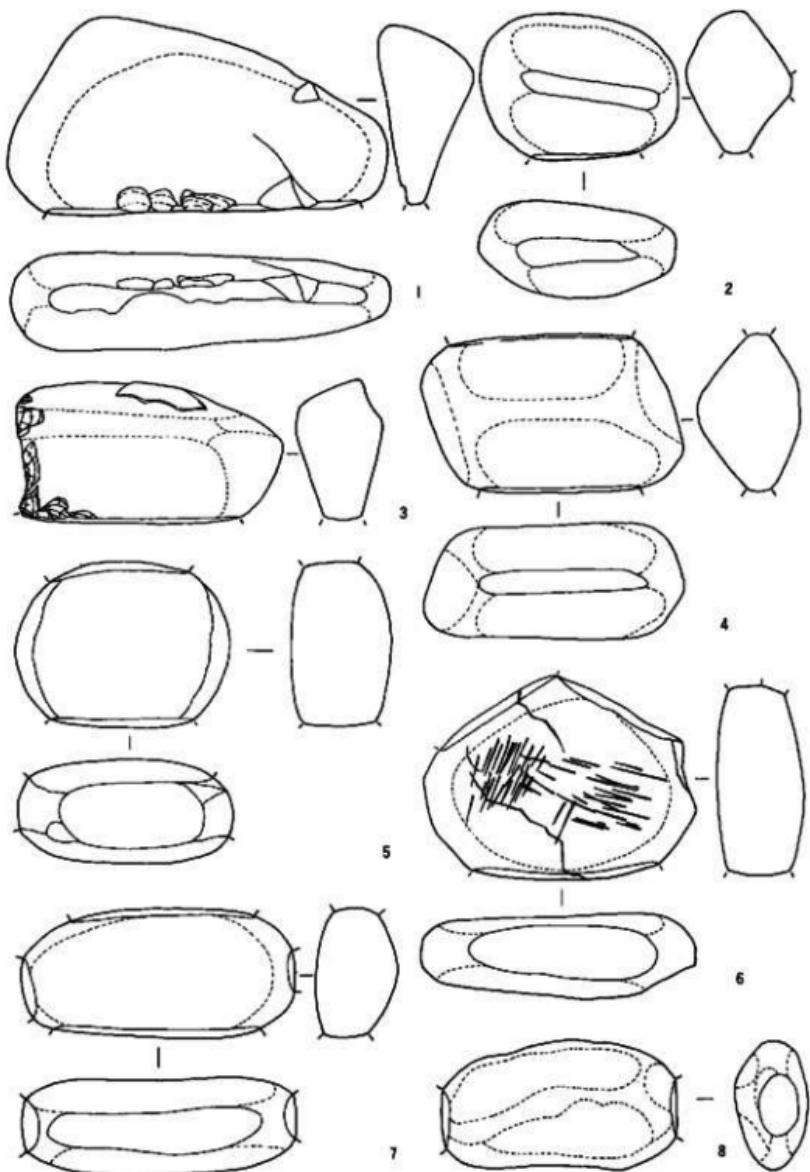
S = 1 : 1.5

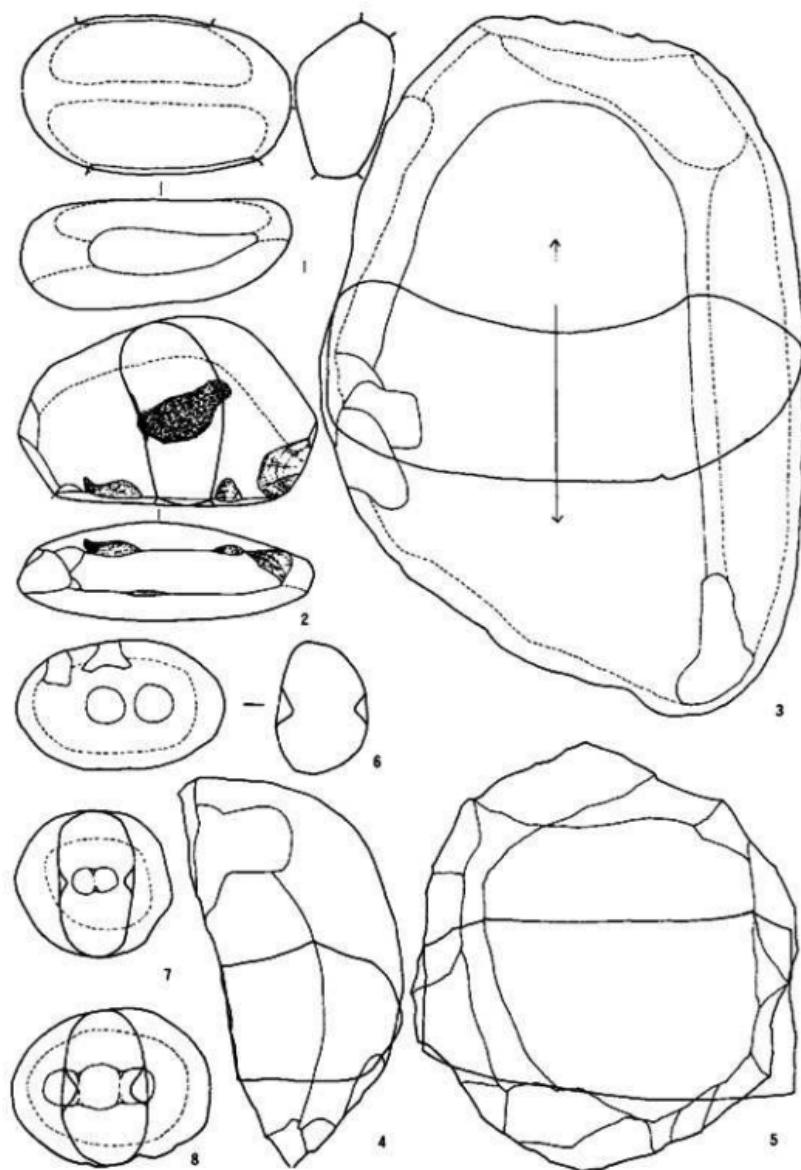


縄文時代の石器

S = 1 : 2

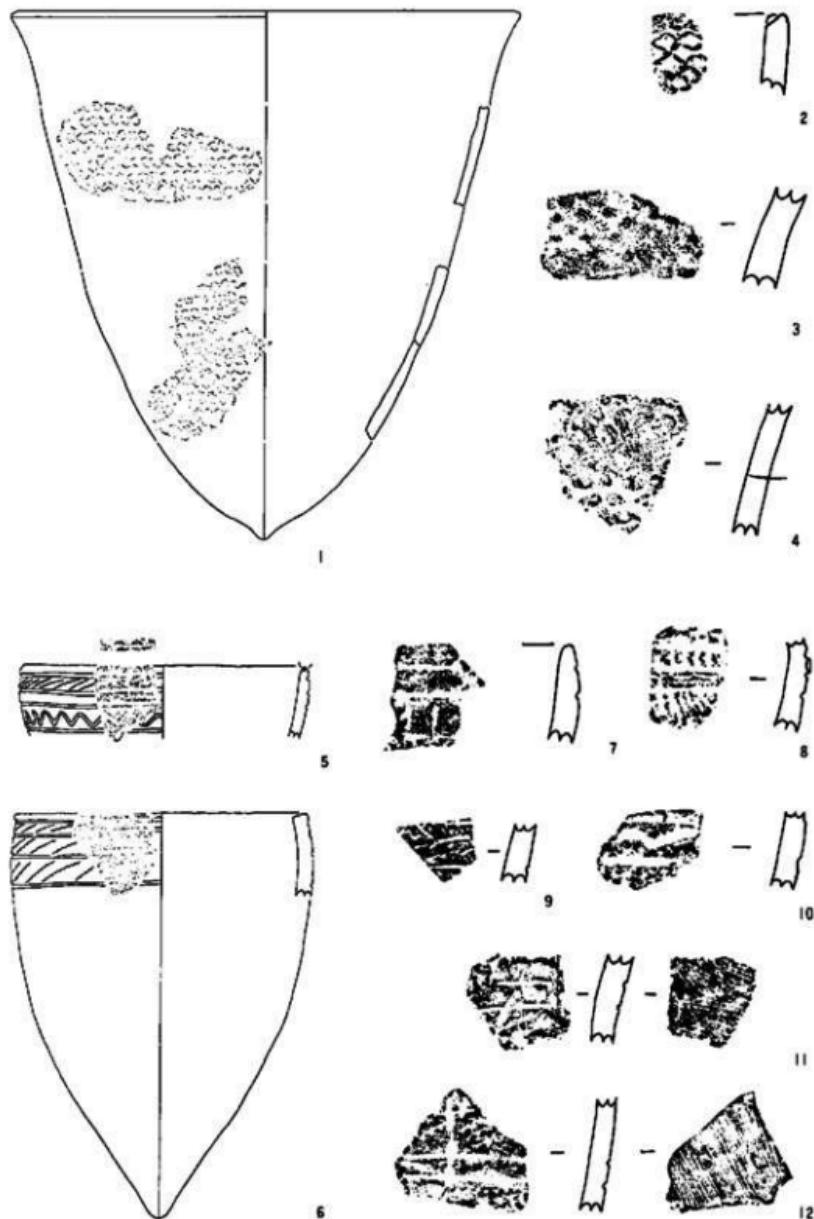






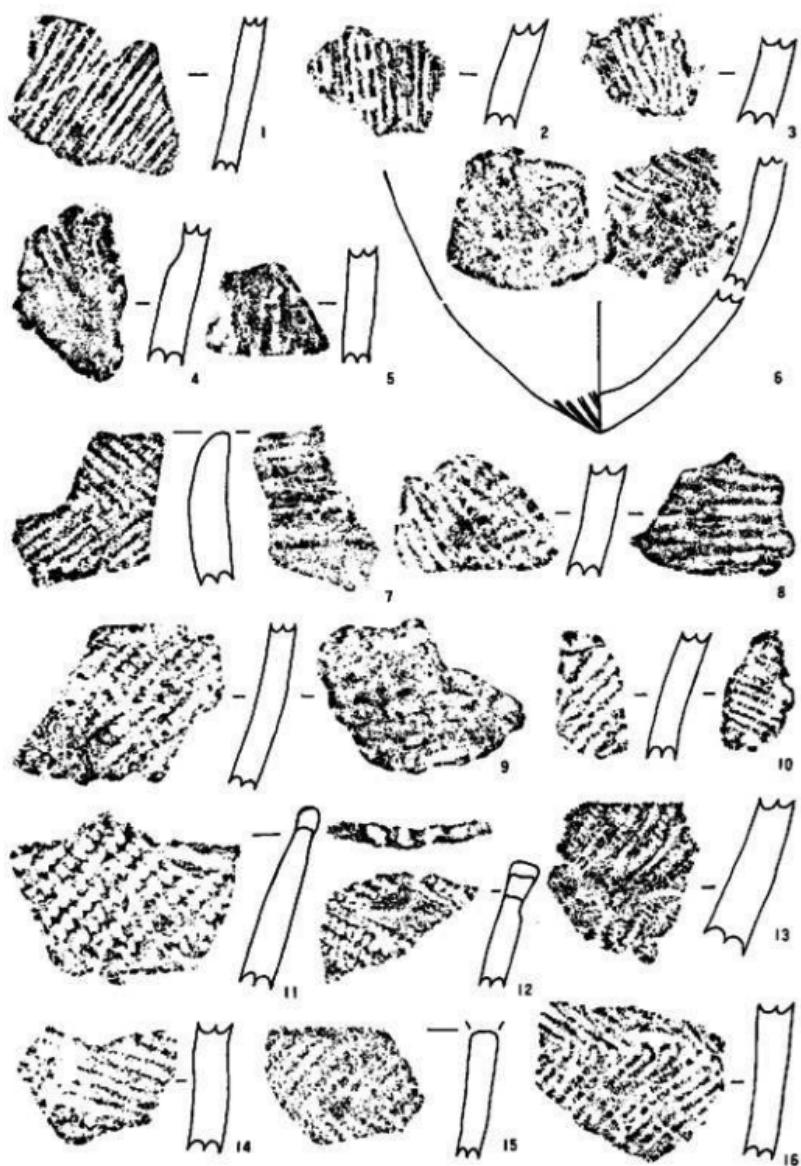
縄文時代の石器

S = 1 : 3



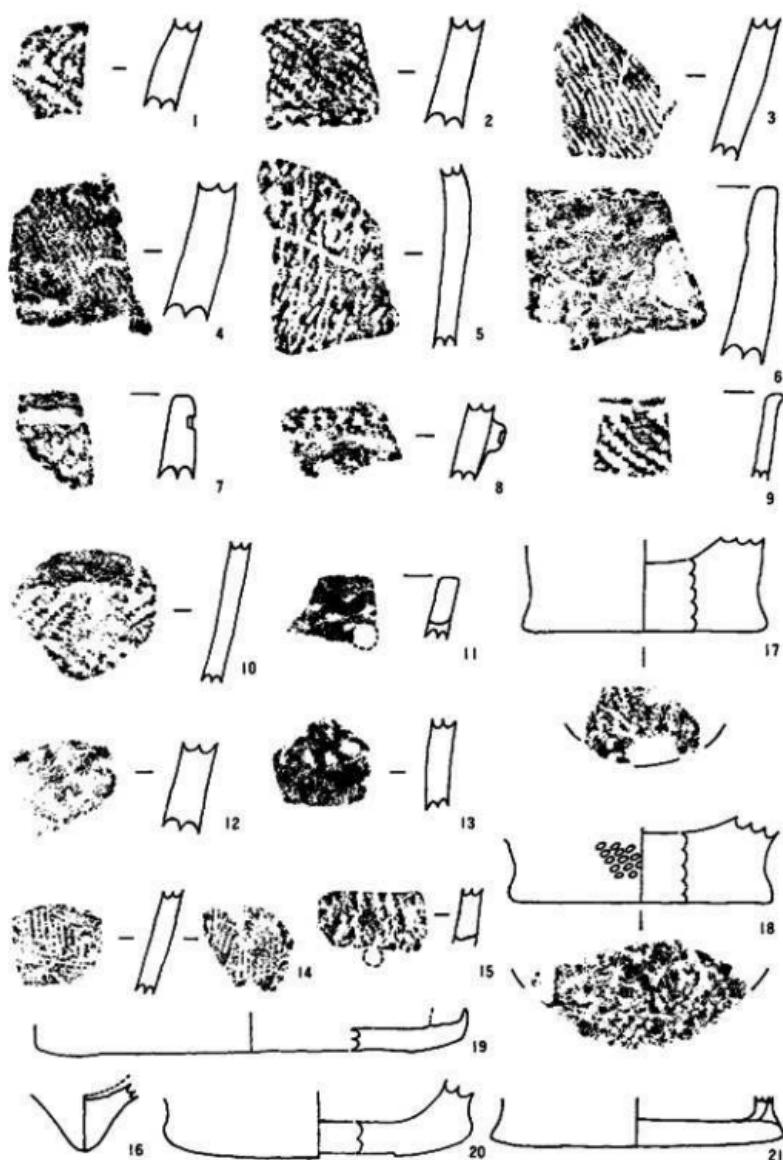
縄文時代早期の土器 1・5・6 S=1:3, 他

S=1:2



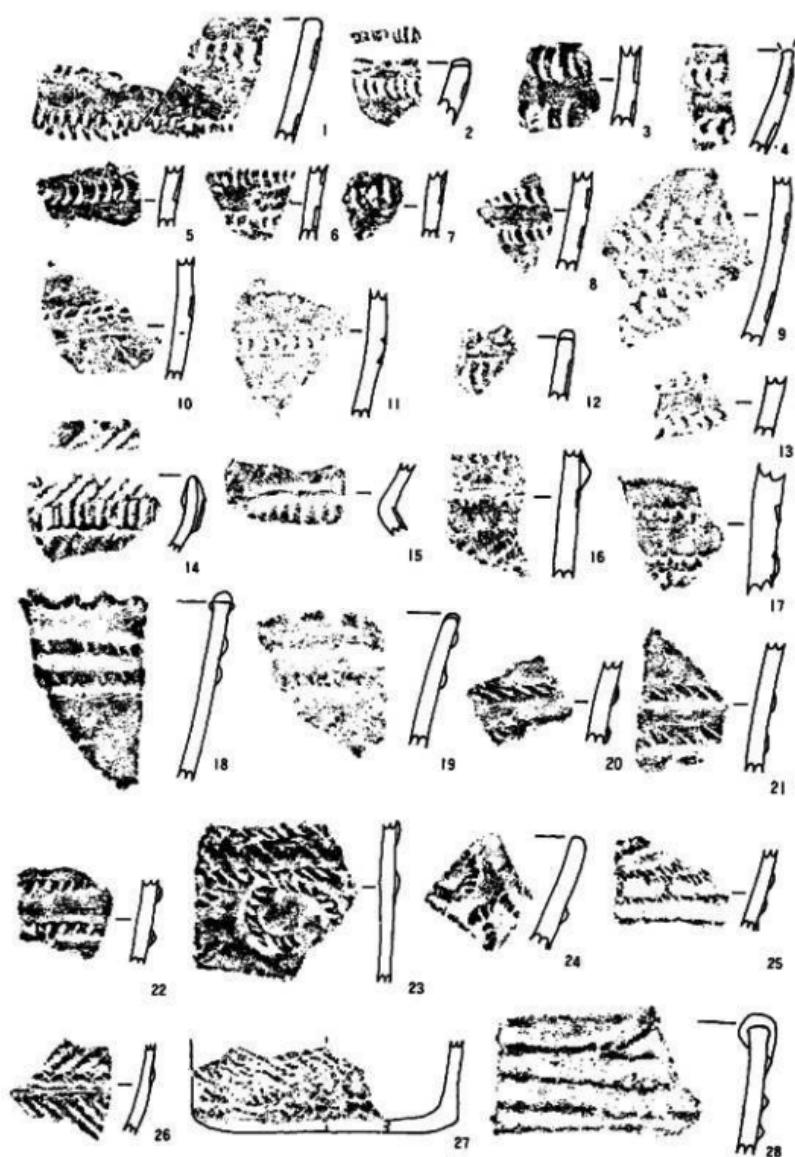
第一群第一様式K型(1~6) 第二様式J型等

S = 1 : 2



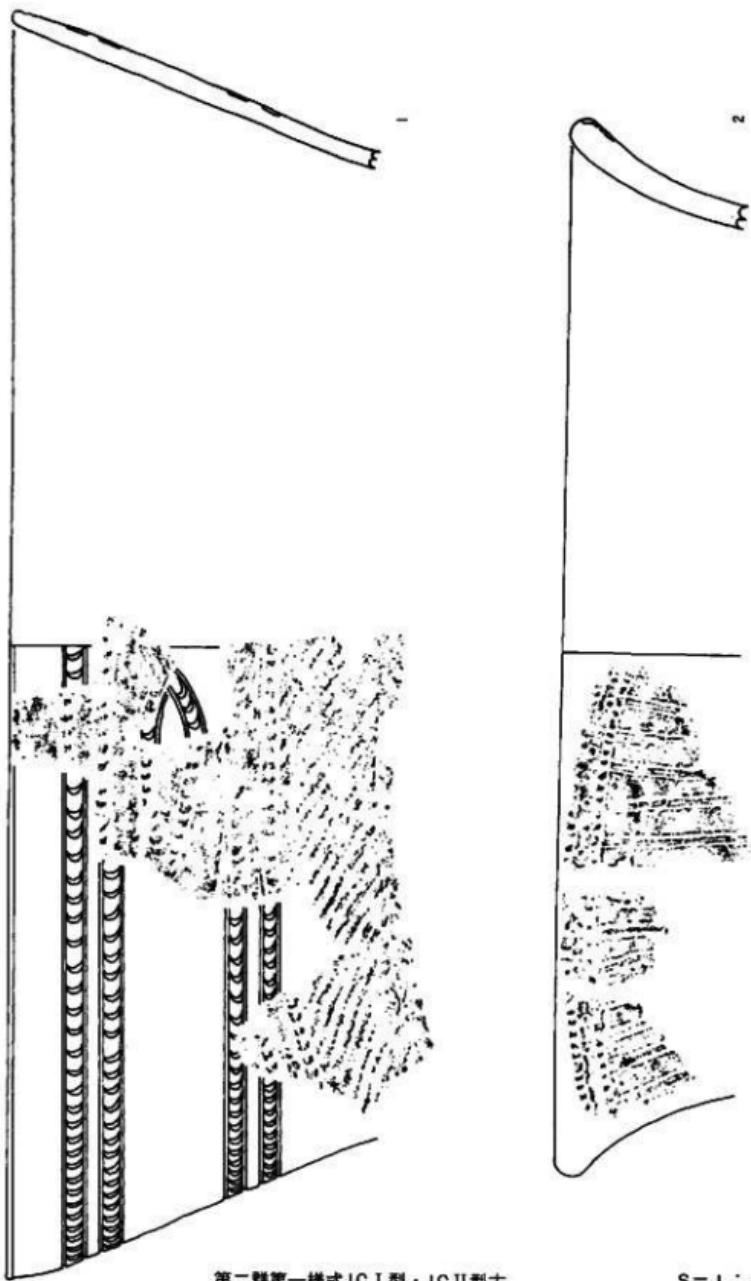
第一群土器等

S = 1 : 2



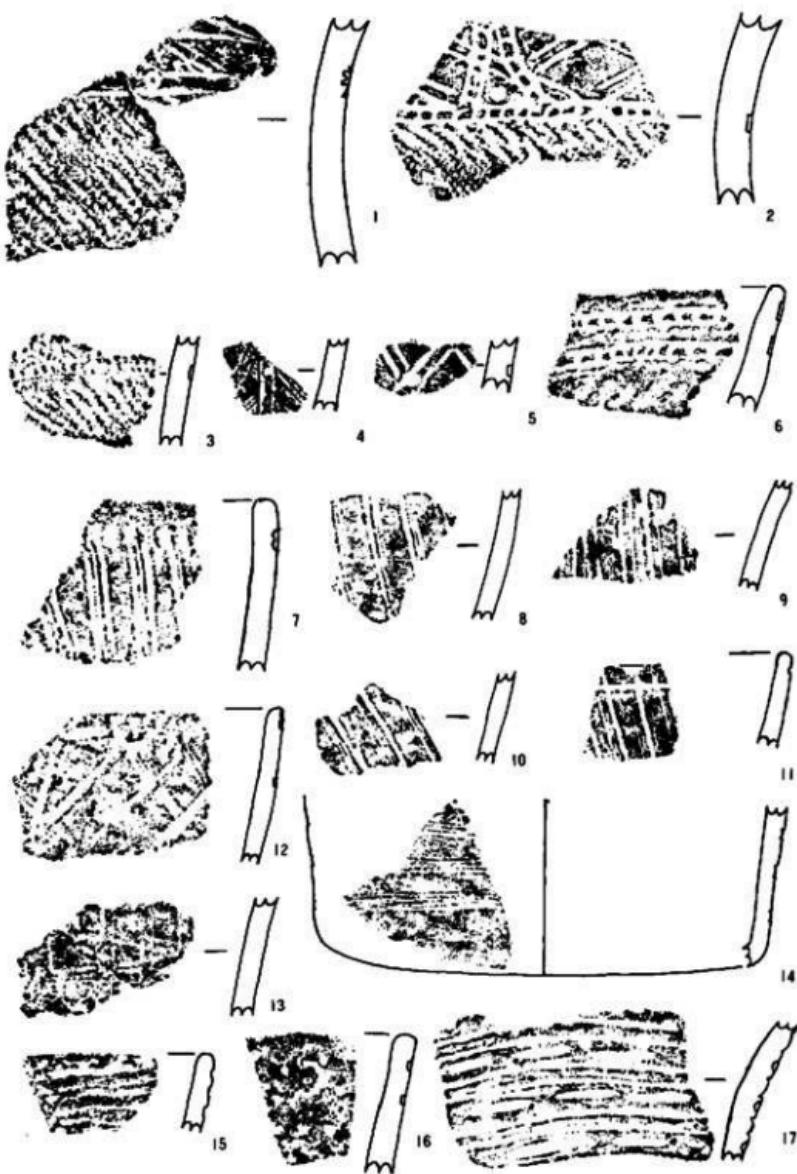
第二群第一様式JC I型(1~17) 第二様式JR I型

S = 1 : 2



第二群第一様式JC I型・JC II型古

S = 1 : 2





第二群第三様式J型

S = 1 : 2



上：圓山遺跡全景。下：第1号方形周溝墓と第2号土坑



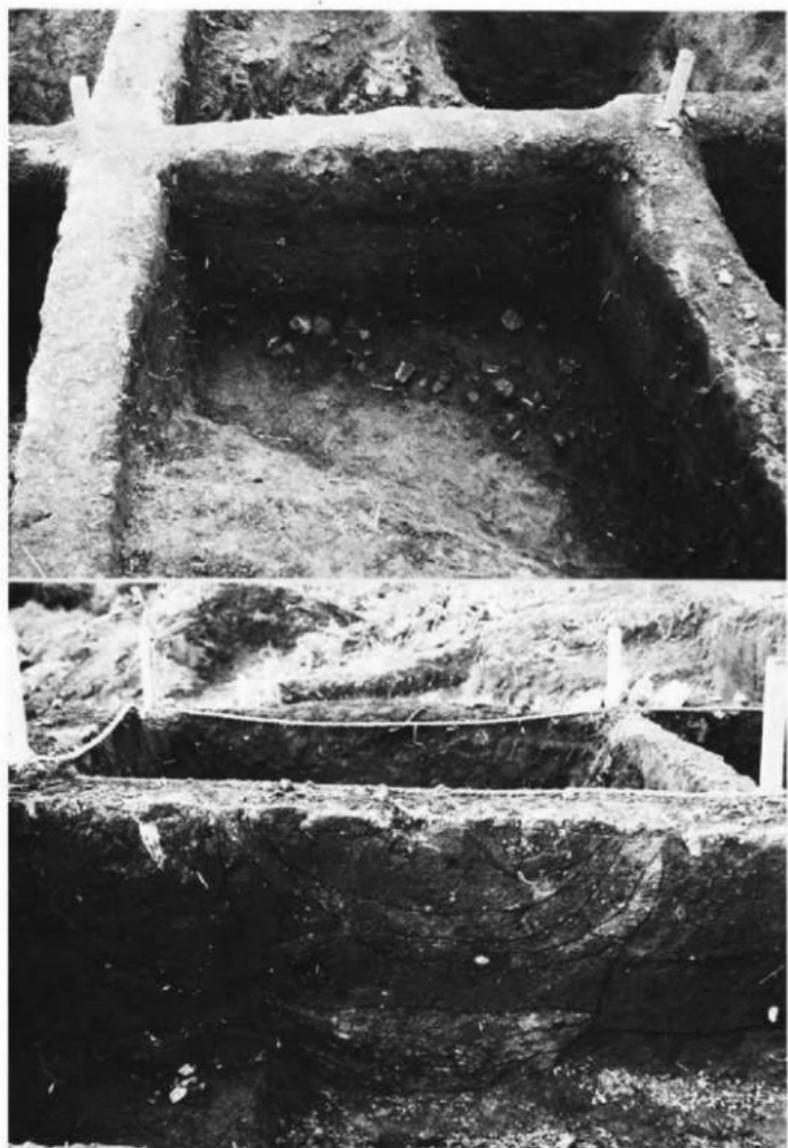
上：第3号土塚と第4号方形周溝墓・下：鉄錐出土状況



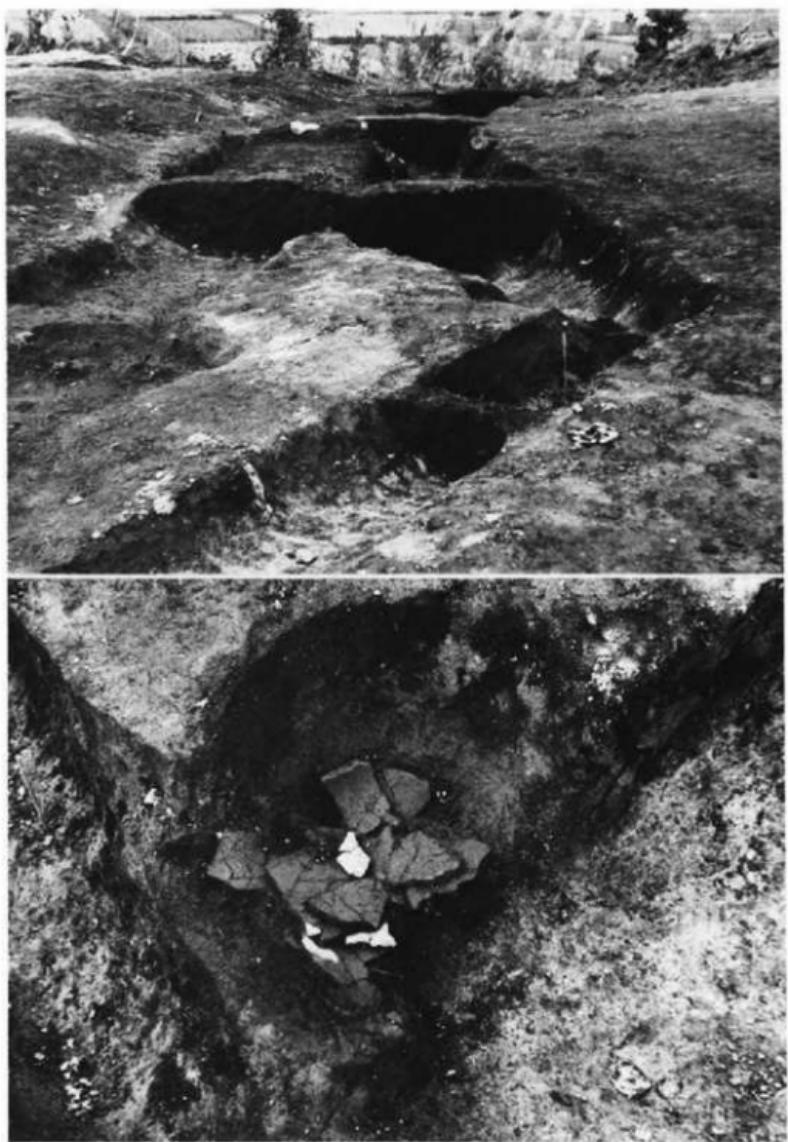
上：第3号方形周溝墓と歴史時代溝との切り合い・下：第3号方形周溝セクション



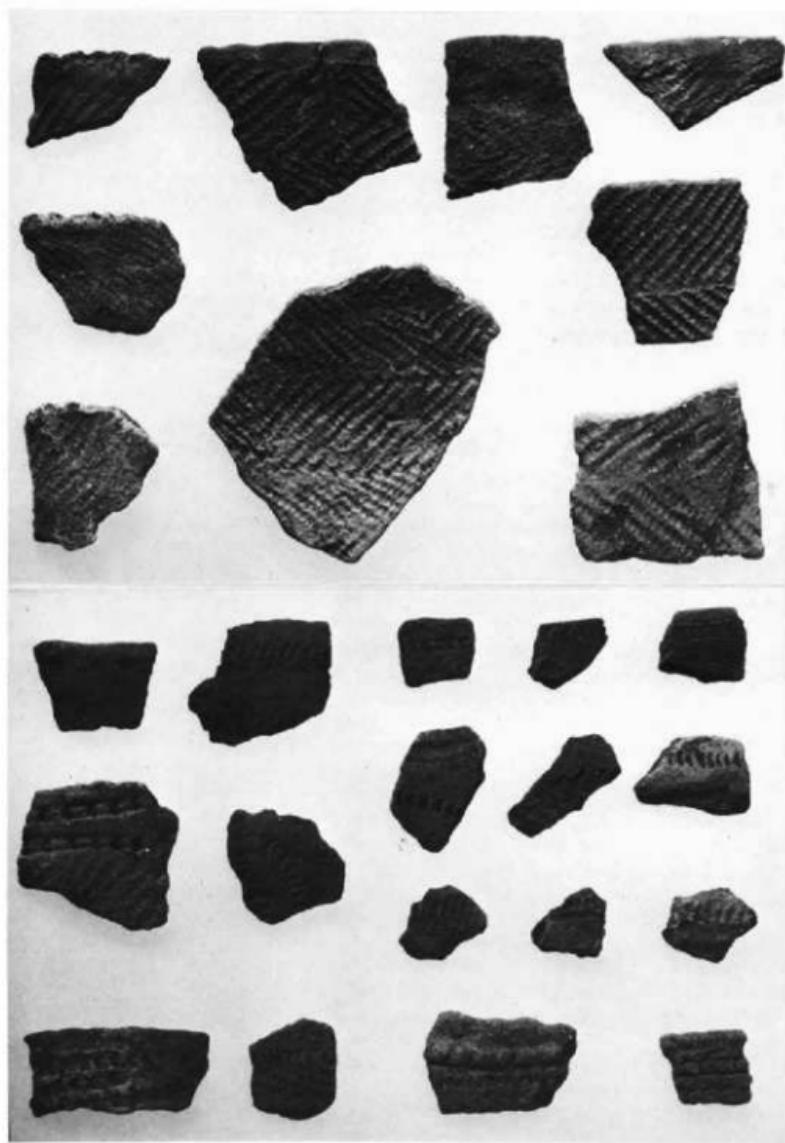
上：第3号方形周溝内遺物出土状況・下：第4号方形周溝墓第2層



上：第4号方形周溝内・下：第4号方形周溝墓内掘込み

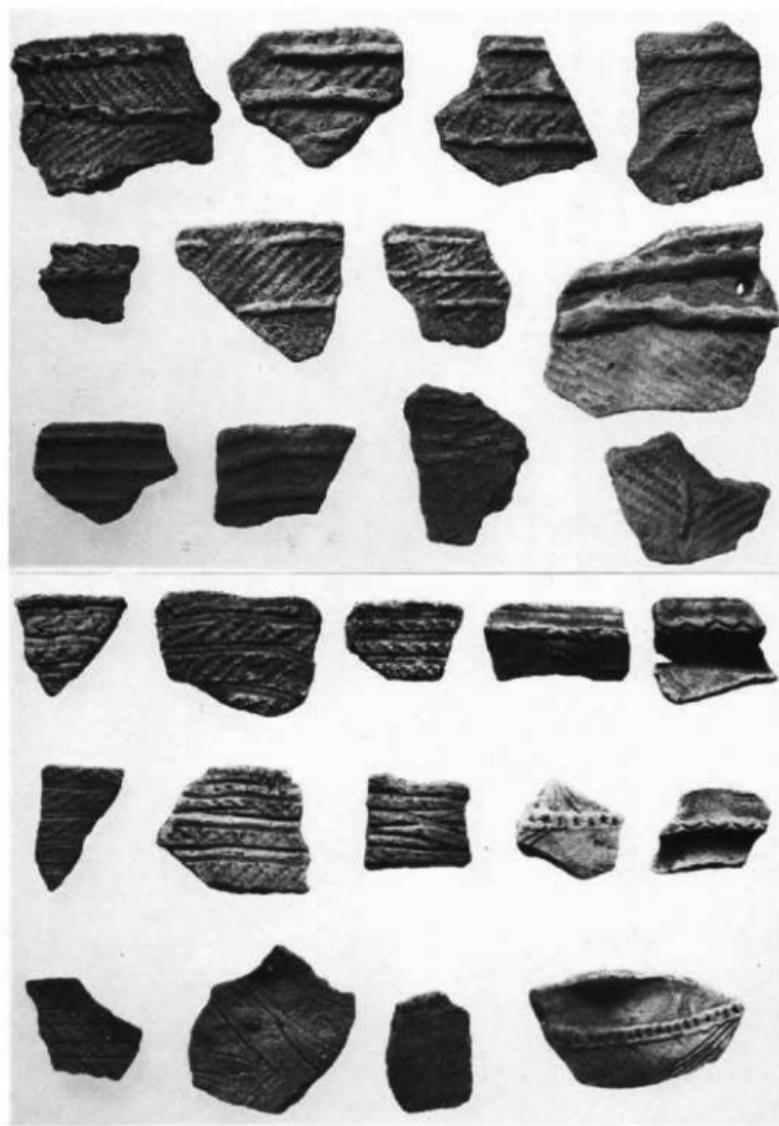


上：歴史時代溝・下：縄文ピット



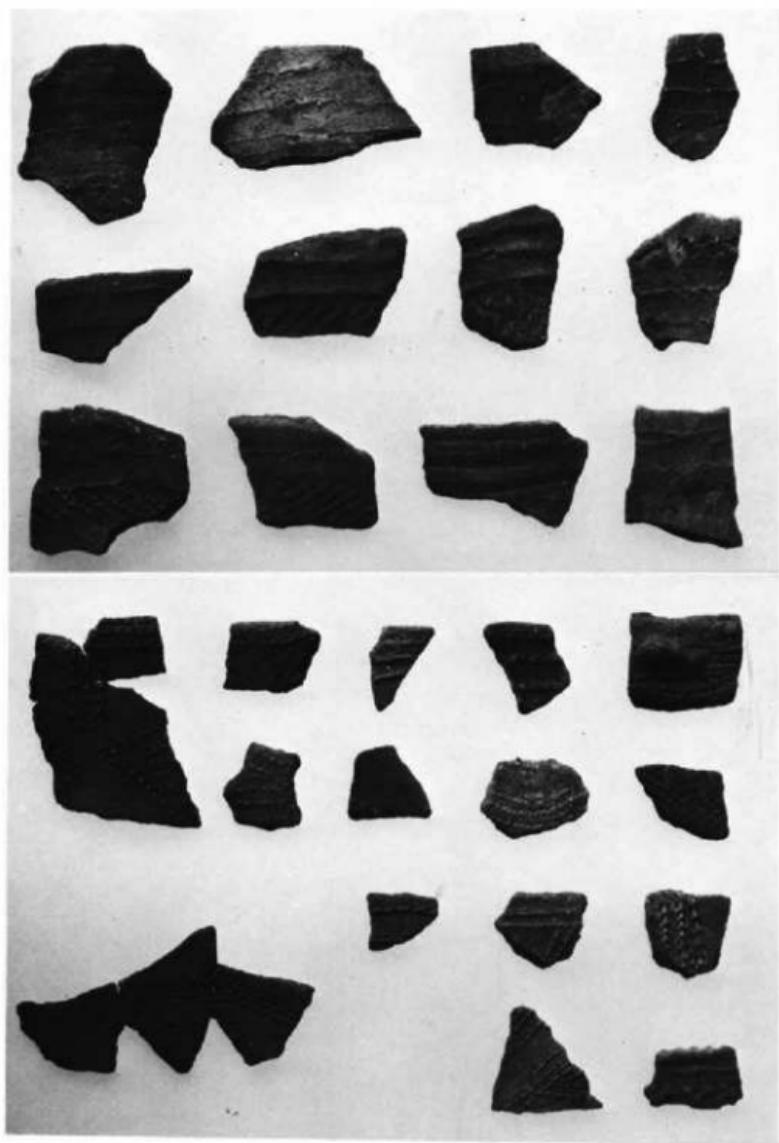
上：第二群第一様式J型等・下：第一様式JC I型等

S = 1 : 2



上：第二群第二樣式JR型等・下：第二樣式第三樣式

S = 1 : 2



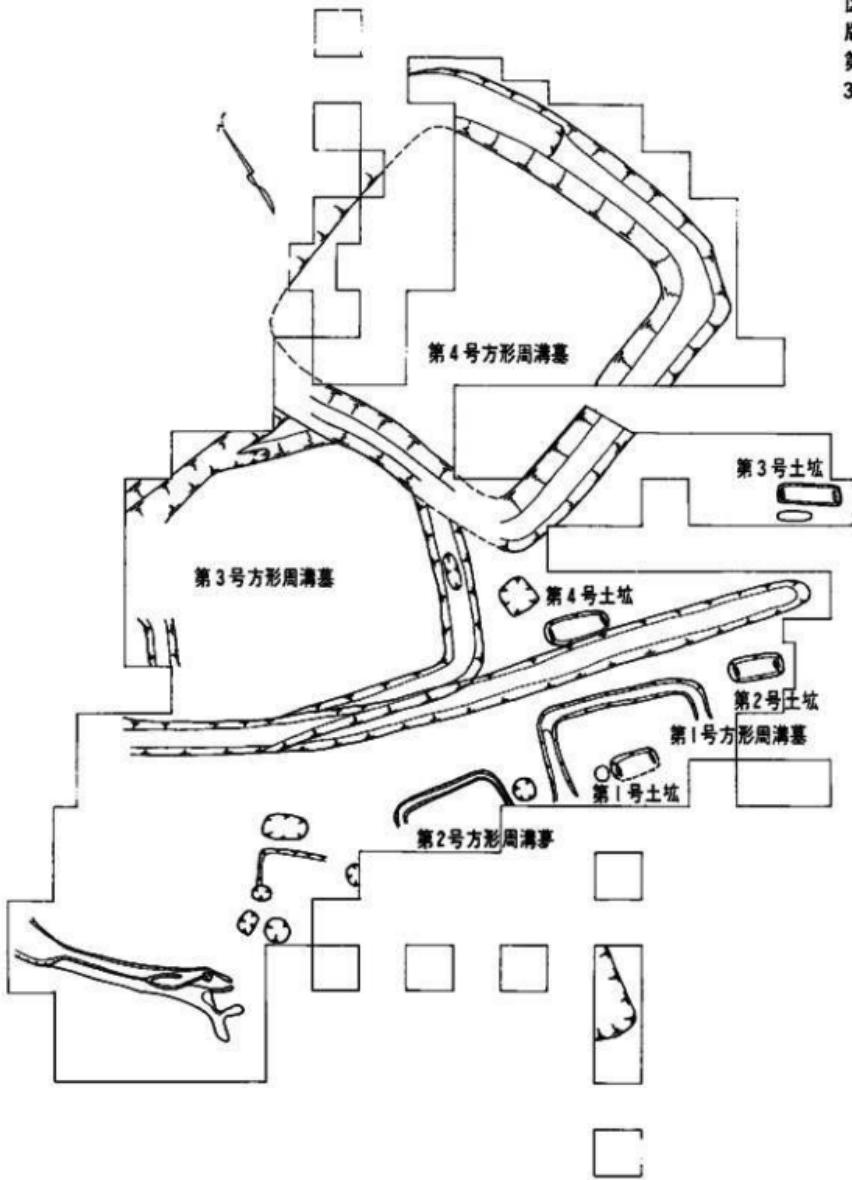
上：第二群第三様式JR I型・下：第四様式JR II型

S=1:2



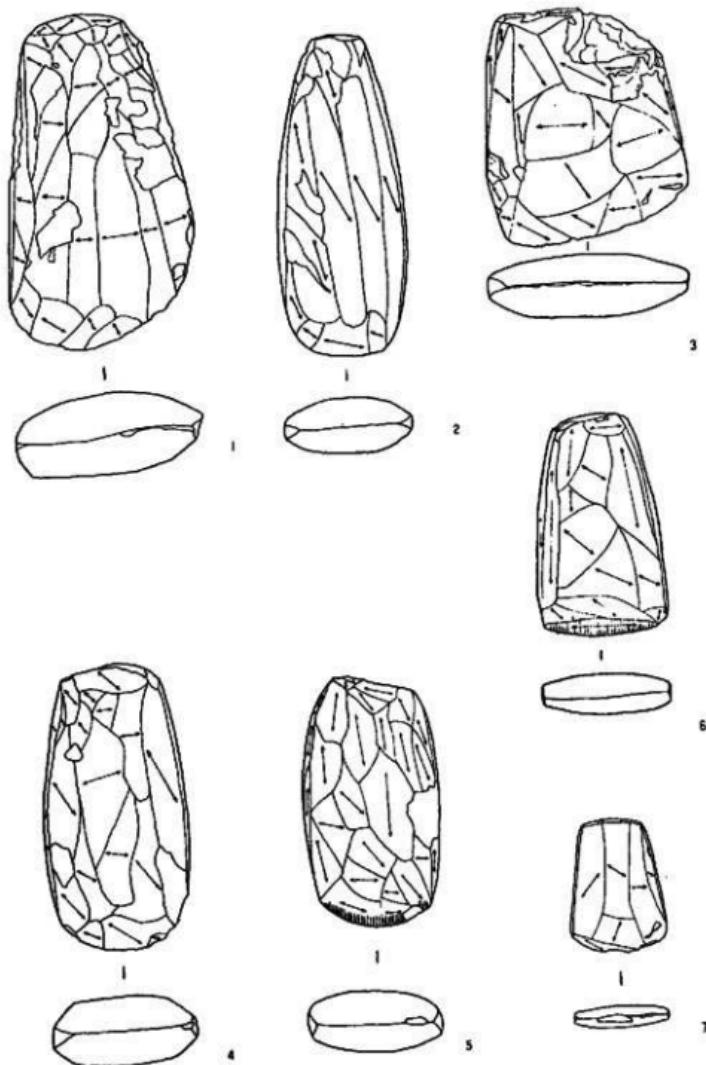
囲山遺跡地形図

S = 1 : 1,000



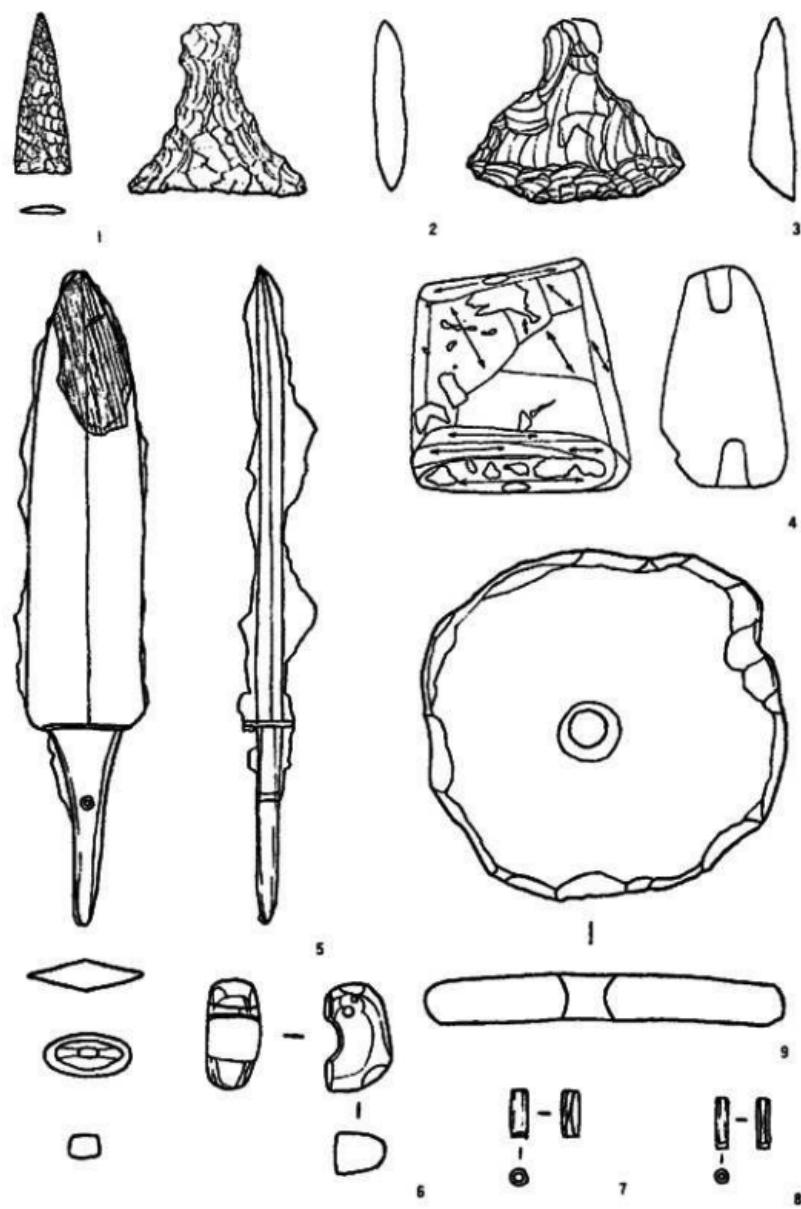
### 発掘区及び遺構分布図

S = 1 : 60



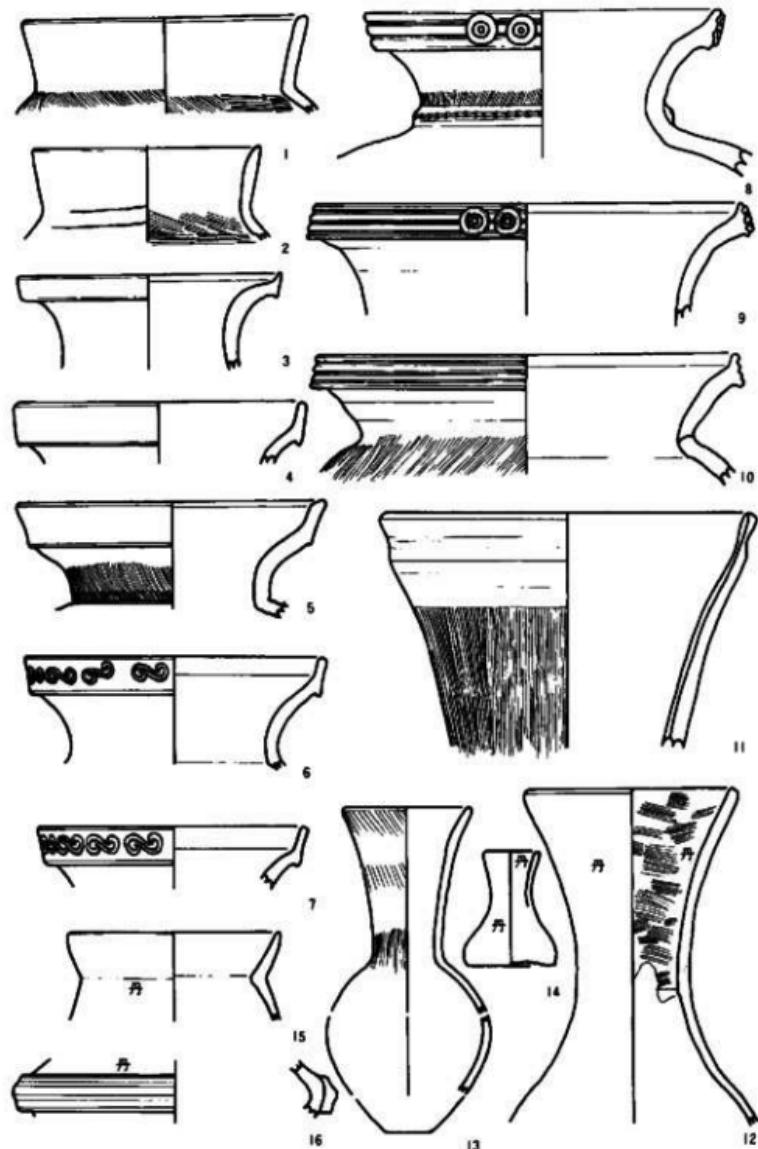
縄文時代の石器

S = 1 : 1.5



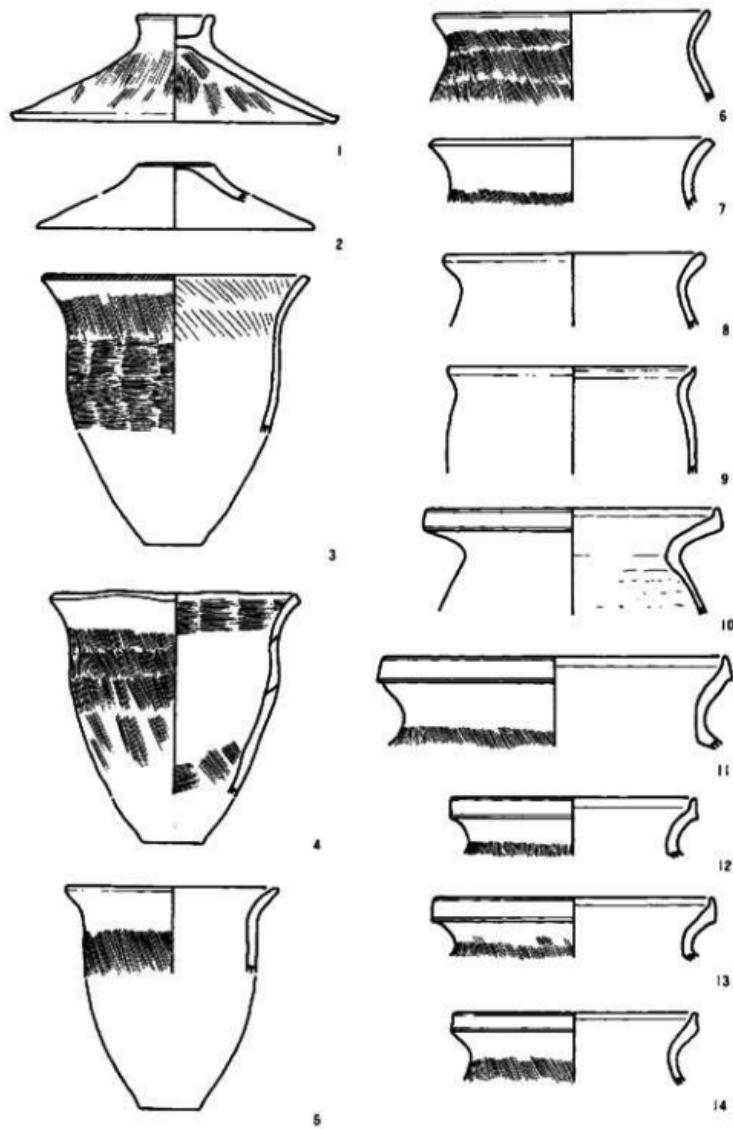
縄文時代の石器(1~4) 満生時代の遺物(5~8)

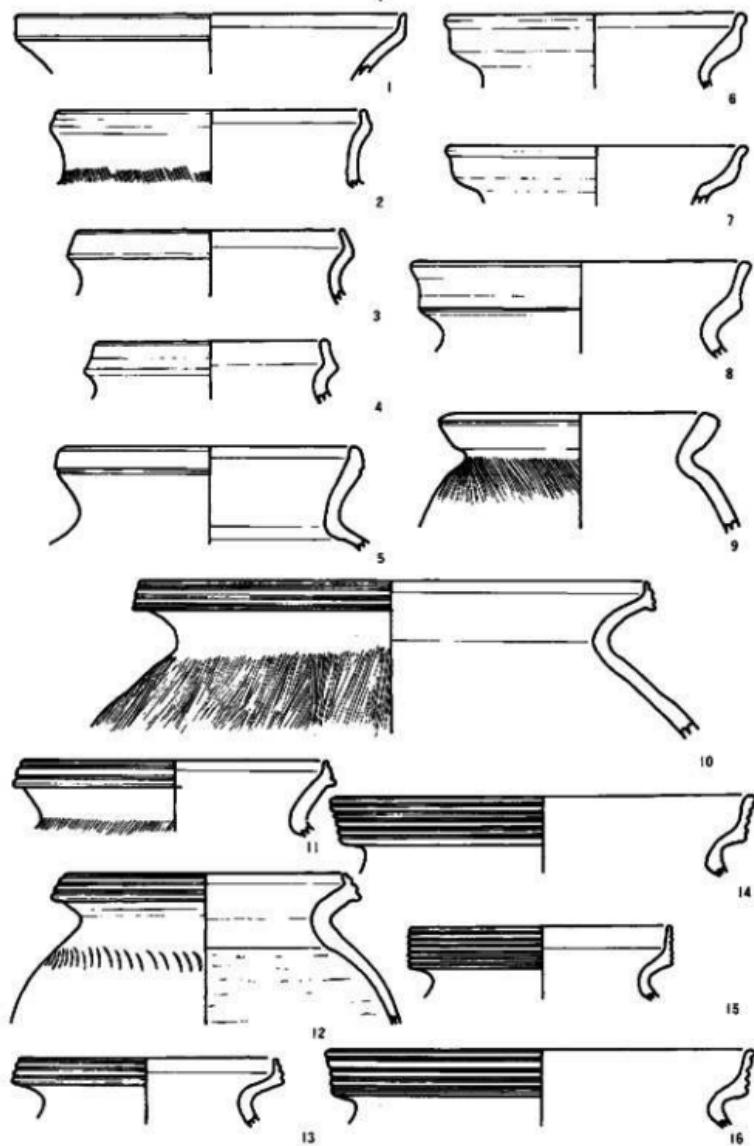
S = 1 : 1

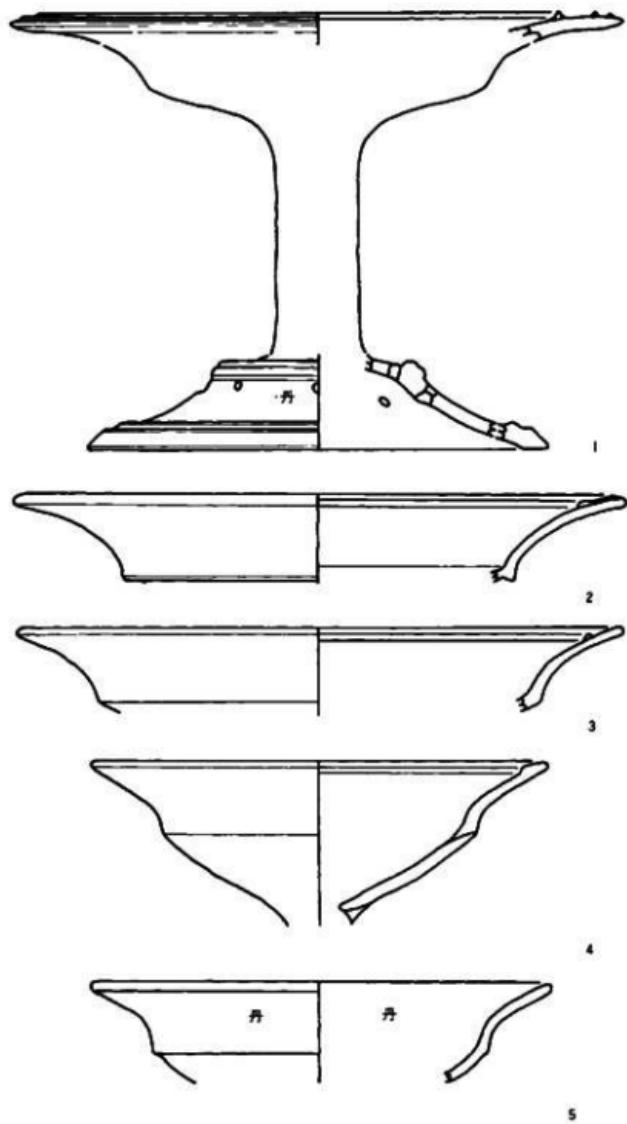


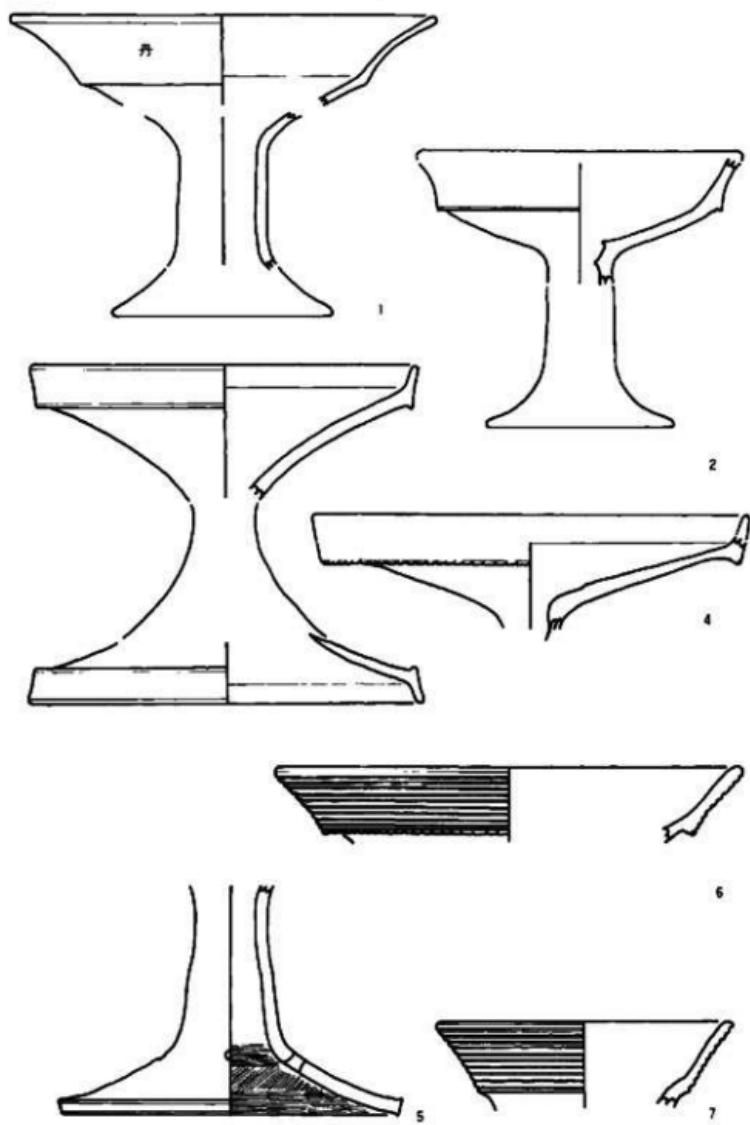
弥生式土器

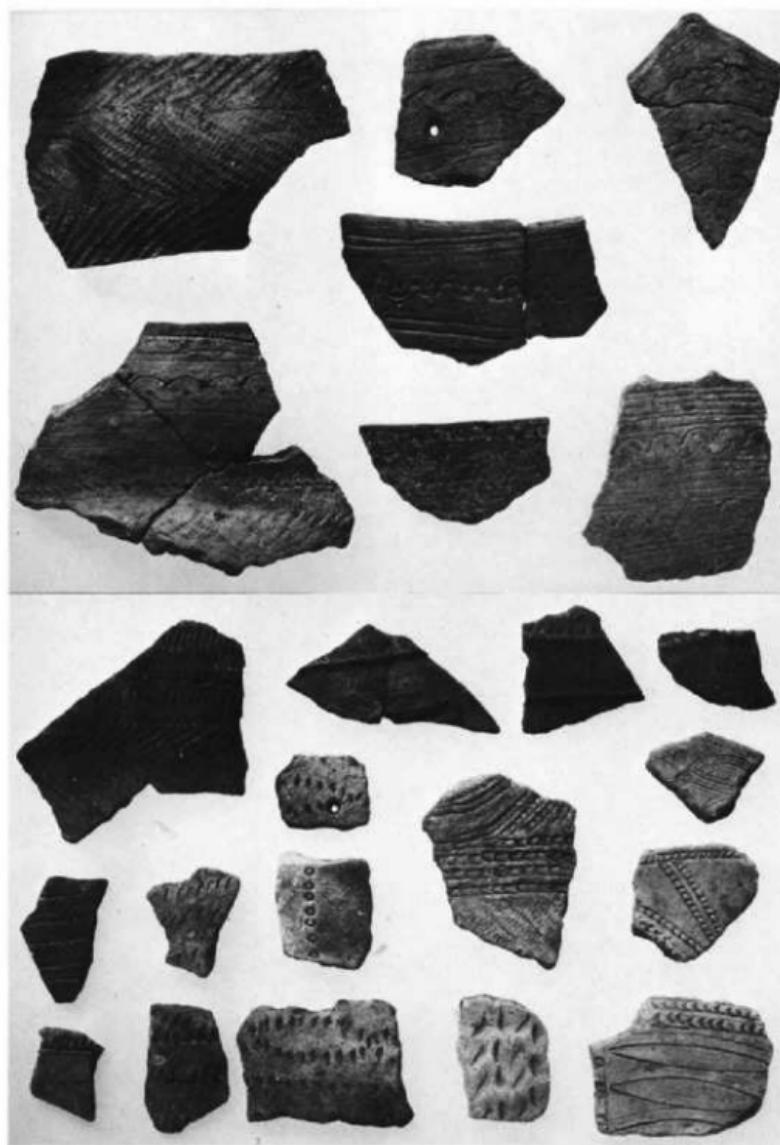
S = 1 : 3





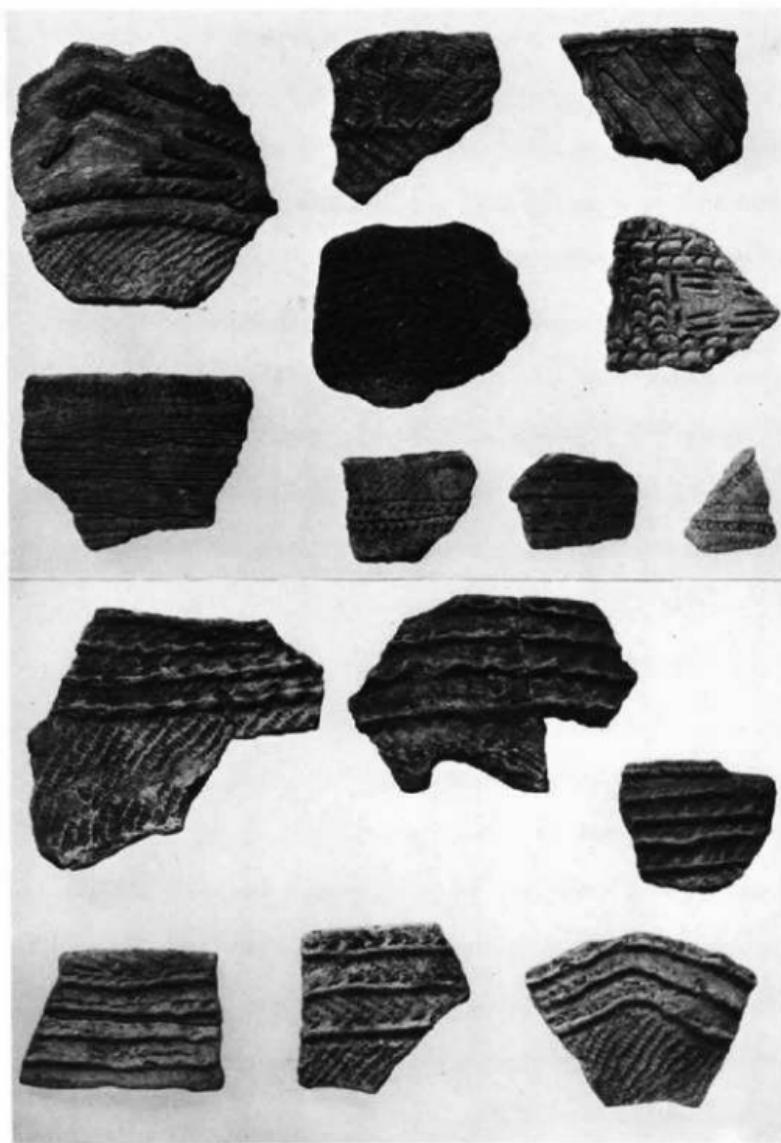






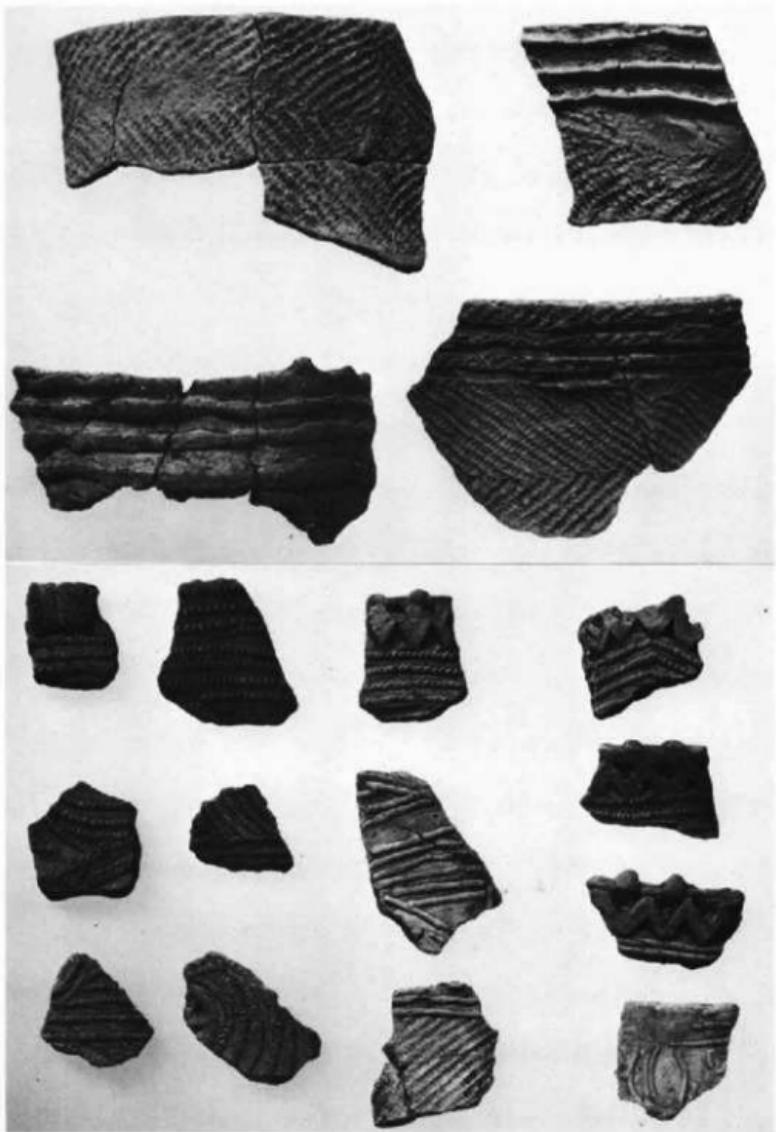
上：第二群第一樣式JC II型古・下：第一樣式JC I型等

S = 1 : 2



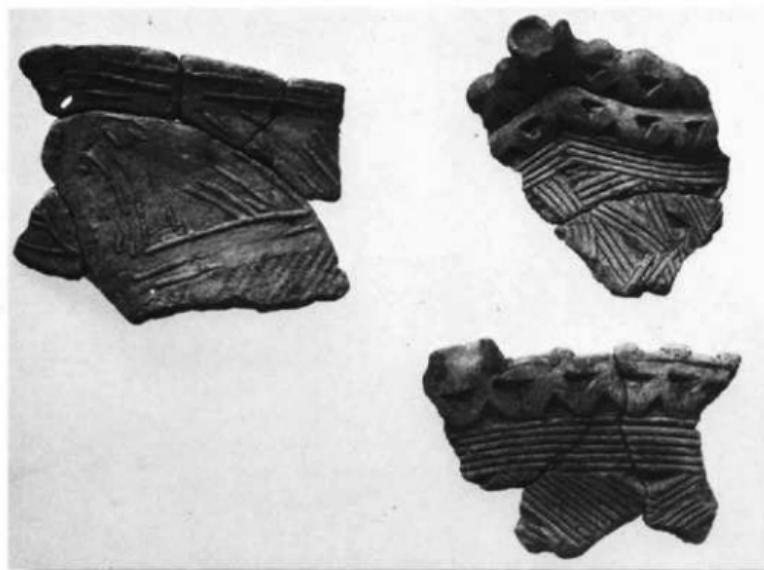
上下：前期第二群第二様式JRⅠ型等

S = 1 : 2



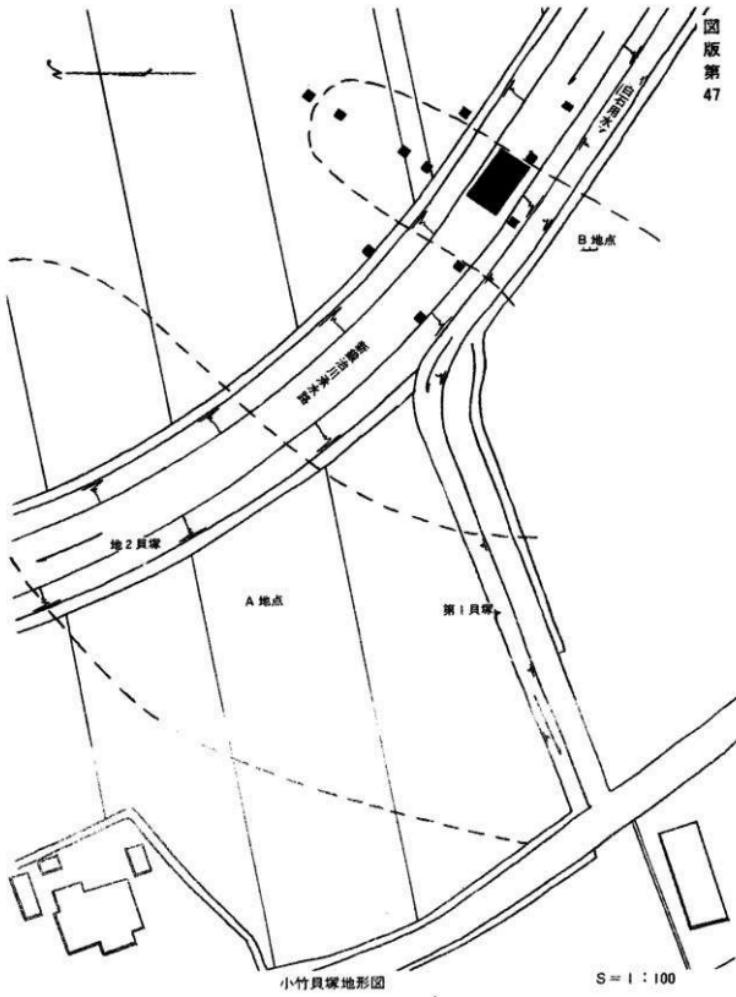
上：第二群第三樣式・下：第四樣式等

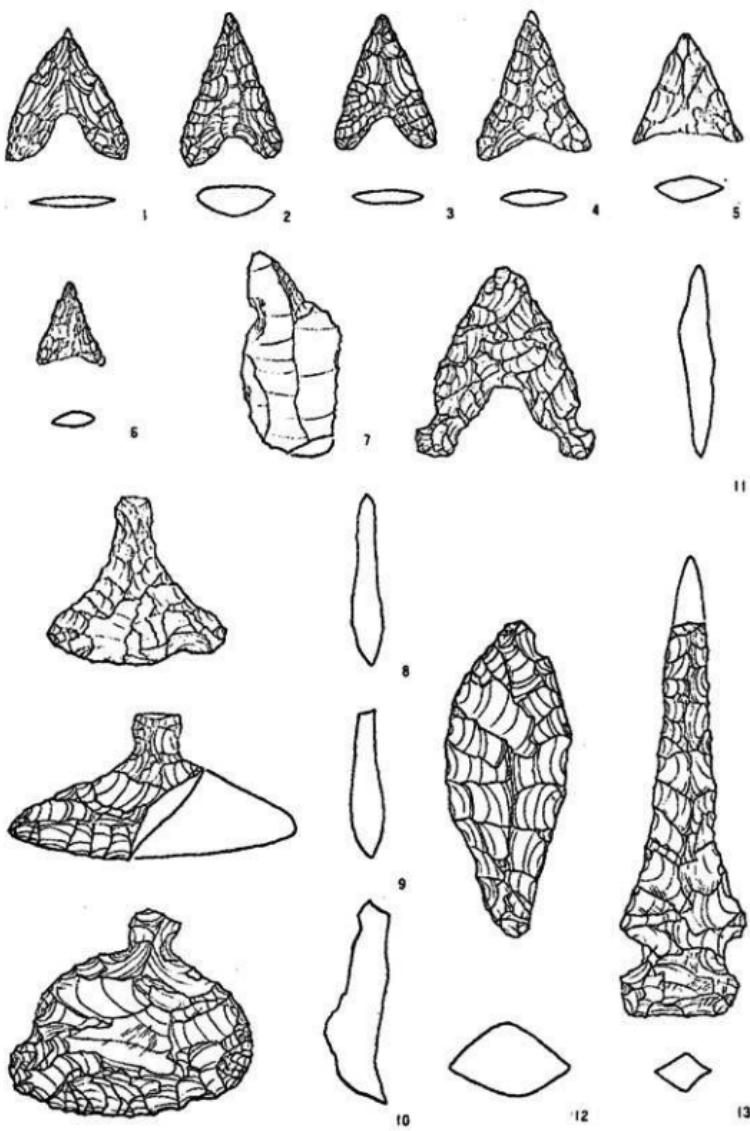
S = 1 : 2



上下：第二群第四樣式第五樣式等

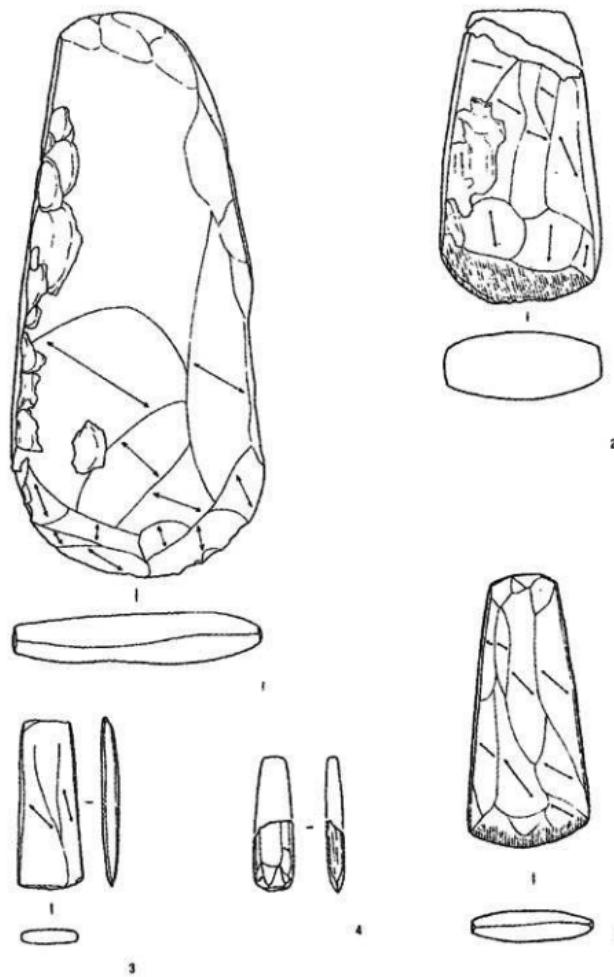
S = 1 : 2





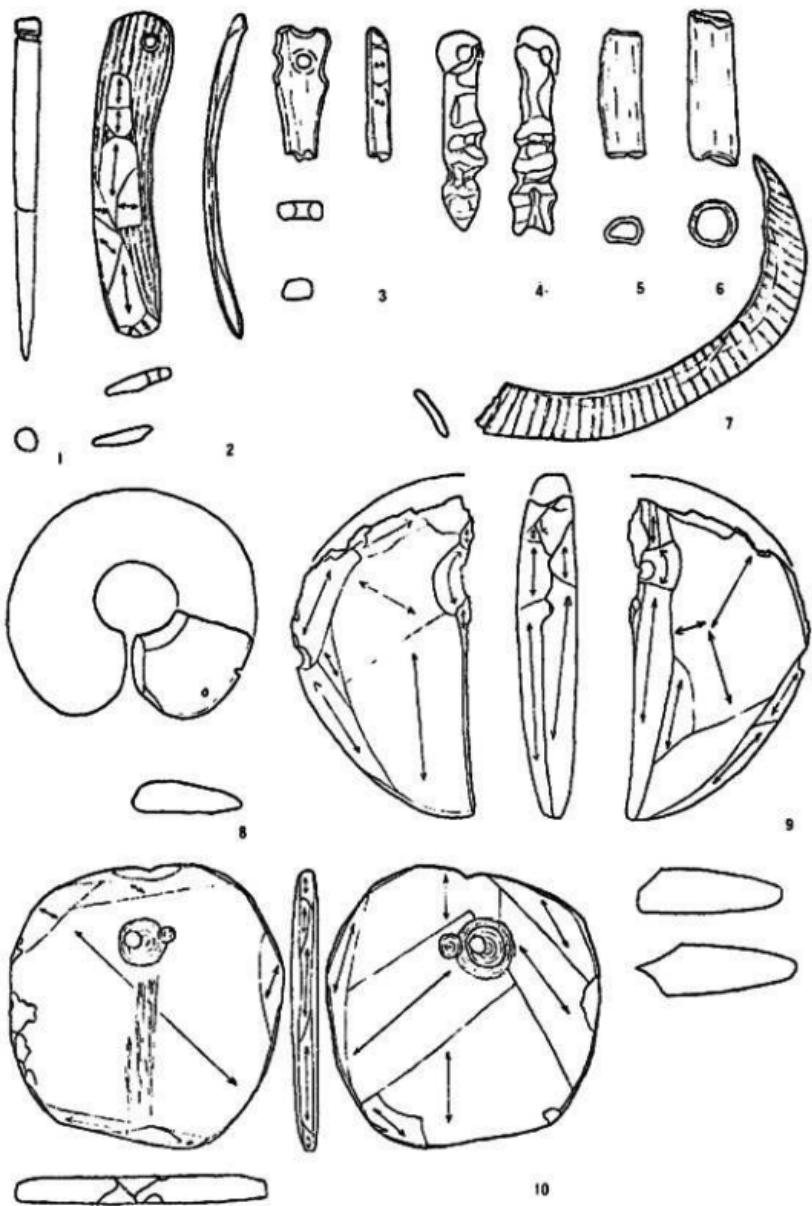
縄文時代の石器

S = 1 : 1



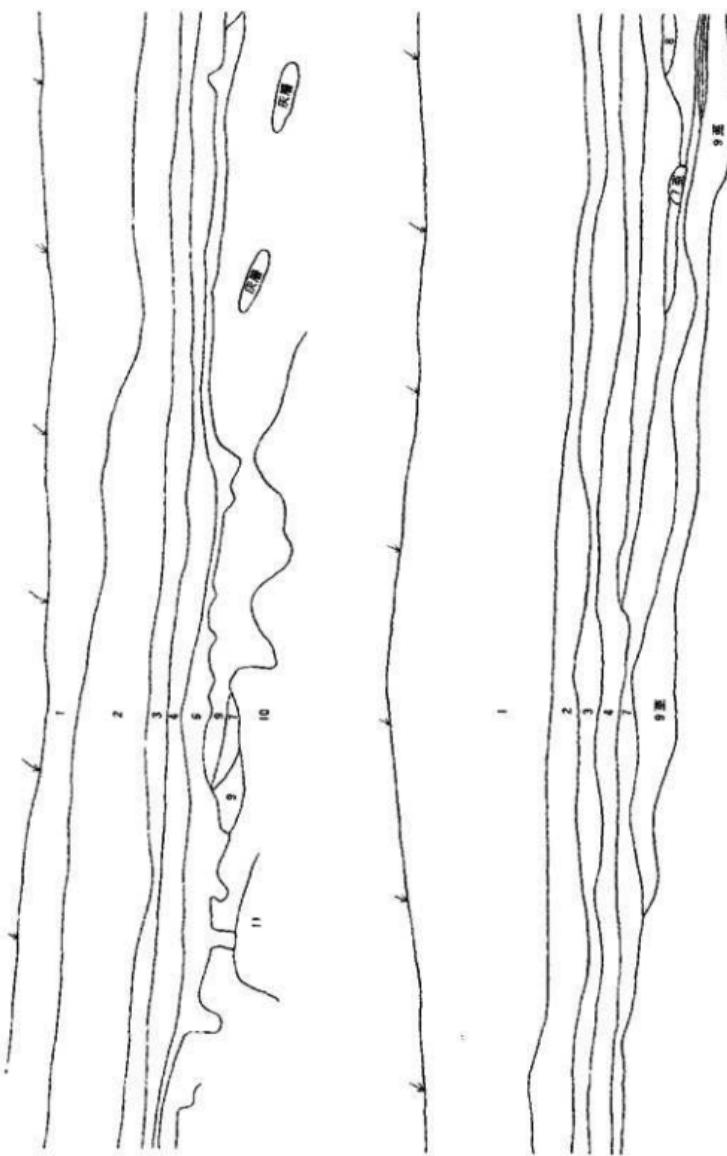
縄文時代の石器

S = 1 : 1.5



縄文時代の骨角器及び石器(9・10)

S = 1 : 1



小竹貝塚の層序  
(第2貝塚西側)

S = 1 : 20

富山県埋蔵文化財調査報告書II

発行日 1972年3月

発行所 富山県教育委員会

印刷所 富山スガキ株式会社